

2019 年度
自己点検評価報告書

目 白 大 学

大 学 院

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価单位名称)	国際交流研究科
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	研究科長	
	氏名	飛田 満	

(1)特筆すべき事項

【教育・研究・社会貢献】

- ①前年度に引き続き、2019年度F D活動の目標として「研究科全体による論文指導体制の強化」を掲げ、年間を通じて研究科を挙げて論文指導のあり方を検討した。
- ②7月27日に修士論文中間発表会を、2月1日には最終試験を公開で開催した。1年生から学生全員の出席を義務づけ、教員も多数出席してコメントやアドバイスを与え、活発な質疑応答と意見交換をおこなった。
- ③研究科全体による論文指導体制の強化と並行して、いわゆるゼミ（「国際交流研究演習」「修士論文指導演習」）を中心として、研究の進め方や論文の書き方に関する様々なレベルでのきめ細かな少人数・個別指導も徹底しておこなった。その結果、2年次・過年次生15名中11名が修士論文を提出、9名が試験に合格して課程を修了した。
- ④修士生9名のうち7名が就職し、そのうち6名は国内での就職。ほかに1名が国内での進学、1名が帰国した。
- ⑤社会貢献活動や地域連携事業の一環として、また国際交流に関する共同研究の場として、国際交流研究科「第5回公開講演会」を開催した。日本エンシカル推進協議会会長で東京都市大学名誉教授の中原秀樹氏を講師に迎え、「SDGsとエンシカル消費～持続可能な消費とは何か～」というテーマで講演を実施した。本学学生・院生と一般市民を合わせて80名近い参加者があった。
- ⑥社会学部地域社会学科主催「第12回地域フォーラム」を共催し、研究科の学生にも出席を促した。

【組織マネジメント等】

- ①国際交流研究科の3方針（D P・C P・A P）を策定した。
- ②国際交流研究科の「学位論文に係る評価基準」を策定した。
- ③国際交流研究科の第4次中期計画及び2020年度計画を策定した。
- ④2020年度入試は入学者5名であり全員中国人留学生であった。
- ⑤入試広報部の支援により研究科紹介チラシを制作し関係先に送付した。
- ⑥論文指導教員である専任教員1名の定年退職にともない、科目担当教員として非常勤講師1名を採用した。
- ⑦新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、全学的に学位記手交式が中止となり、急遽、学位記等の郵送、アンケート類のメール回収に変更した。同時に学生全員に帰国・渡航歴や症状の有無についてメール確認をおこなった。

(2)今後の課題

【教育・研究・社会貢献】

- ①学位論文に係る評価基準の公表義務化を受け、この基準の適用が円滑に実施されるよう中間発表会及び最終試験を軸とした研究科全体による学位論文の指導体制を強化する。
- ②修士論文最終試験で合格判定を出したものの、一部論文の質やレベルの点で必ずしも十分ではないものがあり、論文指導担当教員のよりきめ細かな厳しい指導が望まれる。
- ③学生・教職員・一般市民を対象とした国際交流研究科「第6回公開講演会」を開催する。ただし新型コロナウイルス感染症の状況によっては中止する場合もありうる。
- ④修士生の進路・就職状況の把握、学生の就職活動を支援するためのキャリアセンターとの連携、とくに留学生向け就活セミナー等の情報共有を図る。
- ⑤研究科構成員の研究活動や社会貢献活動の成果の情報発信に関して、研究科ウェブサイトを活用して効果的・積極的におこなうように働きかけていく。

【組織マネジメント等】

- ①社会学部2学科（地域社会学科・社会情報学科）をベースとし、社会学部の専門教育に接続させた国際交流研究科のカリキュラムの改訂または開設科目の見直しに関する議論を継続する。ただし2020年度は2021年度からの社会学部2学科のリニューアルに向けた準備期間であるため、そちらの作業過程を優先させながら、研究科としては新たに策定した3方針に基づく第4次中期計画の着実な遂行に力を注ぐ。
- ②国際交流研究科は、中国人留学生が大多数を占め、定員充足も甚だ難しくなった。国際交流研究科であるから、留学生を積極的に受け入れることに問題はないが、今日社会のグローバル化、少子高齢化、高度情報化等が加速し、また社会貢献、生涯学習、産学連携等が求められる中、社会人、本学及び他学の卒業生、リタイア世代、主婦など、異文化交流や多文化共生の問題に関心を持つ多様な層からの掘り起こしを図る。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	国際交流専攻
評価対象年度			2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名		専攻主任	
	氏名		鈴木 章生	
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①修士論文の内容が、「国際・地域社会」「地域文化・交流」に視点を置く研究科の特性にマッチングしていた。 ②修士論文の提出が期日に間に合わず、在学期間を延ばして修士論文を提出する者がいた。 ③修士論文の内容を学会の卒論・修論発表会で発表した者がいた。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①大学院生の修士論文を学会の研究発表、学会誌などで公開して、知名度を上げる。 ②修士論文の文字数は現行は4万字であるが、文字数を減らして内容の質向上を検討する。</p>			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①大学院生の多くは留学生で、日本語能力に問題のある者がいた。 ②論文指導に際して、指導教員とのコミュニケーションがうまくいかず、学生指導に苦慮することがあった。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①日本語能力の高い留学生をできるだけ選抜し、全体的なレベルを引き上げる。 ②ゼミ等において読ませる、書かせる、発表させるの基本的な学びを強化する。</p>			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>特になし</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①今後の取り組み次第ではあるが、社会学部で行っている連携事業や関係団体のイベントへの参加を促し、日本の社会や文化体験を促す。</p>			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①会議、発表会等への参加が少ない教員がいた。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①今後は参加記録を議事に残すなどして参加率を上げる。</p>			
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①大学院生の多くが中国からの留学生であるが、授業科目になると小人数化して孤立感があり、研究交流の機会が不足している。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①大学院生同士の研究交流ができるよう月例会を企画して研究意欲の向上をはかる。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価单位名称)	心理学研究科
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	研究科長	
	氏名	庄司 正実	

(1)特筆すべき事項

【教育】

①現代心理学専攻・臨床心理学専攻ともに修士論文指導に力を入れ、成果を得た。

【学生指導】

①現代心理学専攻、臨床心理学専攻ともにそれぞれの心理専門資格取得に向けた対応を図っている。
②臨床専攻は新しい公認心理師資格に向け早期より臨床実習や論文指導を行うようにしている。

【社会貢献】

①各教員は、それぞれの専門分野において、研究およびその実践による社会貢献を行っている。
また、心理カウンセリングセンター相談員としての心理相談活動、新宿区との提携による小中学校、特別支援学校等への巡回指導などの地域貢献を行っている。

【組織マネジメント】

①学部生への大学院紹介など行ったが、各専攻とも入学者が定員をみたしていない。

【その他】

①「心理学部設置及び6年一貫教育体制」をテーマに4回の研究科FDを実施した。
②臨床心理士試験の合格率は昨年度修了生88.2%(受験生17名中15名合格)、公認心理師試験は合格率70.6%(受験生17名中12名合格)であった。

(2)今後の課題

【教育】

①学部からの大学院進学者、とくに公認心理師養成に伴う進学者増加を目指す必要がある。
②さまざまな背景をもつ社会人学生への対応を検討する。

【学生指導】

①大学院修了後のキャリアパスについて検討と指導が必要である。

【社会貢献】

①毎年実施している研究科講演会について、外部に向けた実施の可能性を検討する

【組織マネジメント】

①各専攻とも入学者の減少が続いており、研究科として入試対策の強化を図り、各専攻で具体的な検討を行う。

【その他】

①入学定員数について、これまでの入学状況も考え再考する必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価单位名称)	現代心理学専攻
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	専攻主任	
	氏名	小野寺 敦子	

項目	自己評価 ※箇条書きにて記入
教育	<p>(1)特筆すべき事項 ①2019年度の現代心理専攻の卒業生に対して十分院生が満足できる教育が行われたといえる。</p> <p>(2)今後の課題 ①社会人に対する授業の開講時間の問題、構想発表の時期などで新たな課題もでてきていた。 ②M1のゼミ選択の時期が現在5月中旬になっており、単位として換算されていない。今後はもっと早くからゼミを決めて単位として認めて行った方がよいのではないかとと思われる。 ③現代心理学専攻の特徴はどこになるのかをもっとはっきり打ち出した方がよいのではないだろうか。現在は、様々な領域を教えられる教員がいるため、この多様性をいかした内容を特徴とするのか？それとも「産業」「発達」「犯罪」「メディア」・・・という中でどこかの領域を強化した専攻作りをするのかを考えてみる必要があると思われる。 ④現代心理学に社会人を今後、多く入学できるようにするには、オンラインでも授業を受けられそれが単位として認められるような授業をコロナが終息しても考えてみる方法もある。</p>
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項 ①2019年に引き続き2020年の入学希望者も減少している。2020年度4月の入学者は4名となっている。 またこの2年間は目白大学学部生からの受験者が激減しているという問題がある。 ②院生のうち、臨床発達心理士の受験資格を希望する学生が毎年いる。(2019年度生は4名中3名、2020年度生は4名中2名)</p> <p>(2)今後の課題 ①本学の学部から現代心理学専攻に入学してきた学生は昨年、同様に少なく2名という状況であった。遠隔授業となっているために、どのように内部学生に現代心理学専攻の内容などについて広報するかが問題である。オンラインなどによっても現代心理学専攻の教育内容等を説明する機会を増やし、内部からの進学者を増やすことが課題である。 ②一般就職を希望している院生に対しての就職指導を強化することは今後の課題である。</p>
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項 ①社会人大学院生の指導を行うことにより、社会に対しても貢献が間接的にできているといえよう。</p> <p>(2)今後の課題 ①各教員は、教育指導と学内業務で日々忙しいが、それぞれの研究分野で研究を行い、それを論文や書籍および講演活動などによって社会貢献ができるように心がけていく必要があるといえよう。</p>
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項 ①現代心理学専攻に所属している専任教員は9名である。原教授は、2019年度末で定年退職された。原教授担当であった2名の社会人大学院生は大嶋専任講師と奈良教授にゼミの研究指導が移った。また2020年度より犯罪心理学領域の財津亘先生が現代心理学専攻の所属となった。 ②令和2年の後期に、現代心理学専攻の今後の方向性と特徴をどのようにして出していくかを検討する必要がある。</p> <p>(2)今後の課題 ①入試への対応：社会人の志願者を増やす工夫を行う。 ②目白の内部生に対する広報を遠隔で行えるかを考える。 ③大学院現代心理学専攻のホームページの作成を進める。 ④各教員の専門性や研究成果をWebなどで発信していく。 ⑤他の学科との科目などの連携を深める。</p>
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>(2)今後の課題</p>

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	臨床心理学専攻
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	専攻主任	
	氏名	田中 勝博	

項目	自己評価 ※箇条書きにて記入
教育	<p>(1)特筆すべき事項 臨床心理学専攻では、修士論文作成にあたり、実証研究促進のためにあらたなカリキュラムを作成し、学生の指導を行った。また、公認心理師の養成のために、講義内容および実習プログラムの見直しを図り、新たなカリキュラムを導入し実施している。</p> <p>(2)今後の課題 新たなカリキュラムを導入して、修士論文作成のさまざまな日程を早めることができ、論文作成や指導がスムーズに行われており、公認心理師などの受験勉強に余裕ができる内容としたが、さらに充実した実習内容を取り入れる。</p>
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項 実習指導について、新たに実習指導支援室を立ち上げ指導を行い、積極的に実習支援を行っている。</p> <p>(2)今後の課題 公認心理師のための実習が多く、それを十分にこなしていくために、専攻内の役割分担が必要であり、講師以上の教員だけではまかないきれないため、助教も指導に加えていく必要がある。</p>
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>(2)今後の課題</p>
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項 受験者数が減少傾向にあり、今年度も入試日を早めるなどの対応を取った。2020年度の心理学部誕生に合わせて、大学院臨床心理学専攻への内部進学枠を設置。人数は若干名定。試験はI期試験より先に実施。内部枠があることを入学案内に明記し、学部のパフレット等でも宣伝を行った。選抜基準：GPA2.8以上で、人物、学業成績ともに優秀で、実習に耐えうる健康度を持っている学生、選抜試験を実施して、5名の合格者を得た。</p> <p>(2)今後の課題 大学院の魅力を高めるために、奨学金の創設が望まれる。内部1～2名、外部1名程度。大学院のパフレットで宣伝を行っていく。</p>
その他	<p>(1)特筆すべき事項 受験者数が減少傾向にあり、その歯止めがきくかどうかについて、見直し点の一つに、夜間開講と30名定員問題がある。受験や入学してくる社会人は少数であり、現役大学生や受験者にとって、夜間開講が負担感や魅力減になっていると推測され、昼開講に変更するのが望ましい。30名定員は、公認心理師資格取得のための実習を考えると15名が教員数および実習先を考えると実施できる人数の限界と考えられ、昼開講と共に定員の見直しが望まれる。科学研究費補助金への積極的な応募、その研究成果の発表が行われている。</p> <p>(2)今後の課題 研究成果の共有の機会については、今後、検討を行っていく必要がある。</p>

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科(博士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	心理学研究科(博士後期課程)
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	研究科長	
	氏名	庄司 正実	

自己評価 ※箇条書きにて記入

(1)特筆すべき事項

- ①入学者は0名であった。在籍者は2年次1名、3年次1名、4年次以上1名である。
- ②博士号取得者は0名であった。
- ③研究指導体制は、研究指導教員6名である。
- ④研究指導科目である社会心理学、発達心理学、健康心理学、カウンセリング心理学、臨床心理学の5領域に合わせて特殊研究科目として社会心理学特殊研究、発達心理学特殊研究、健康心理学特殊研究、カウンセリング心理学特殊研究、臨床心理学特殊研究を行った。
- ⑤博士課程在籍学生がTAとして修士課程学生の論文指導補助を行った。

(2)今後の課題

- ①在籍学生の減少が最も大きな問題と考えられる。入学希望者はいるようなので十分な指導をし、博士後期課程への入学へ結び付けたい。
- ②次年度に博士号取得者予定者がいるため、取得できるように博士論文の指導を行う。
- ③学会発表、学内紀要および学会誌への掲載をするよう学生に指導する。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価単位名称)	経営学研究科
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	研究科長	
	氏名	平林 隆一	

(1)特筆すべき事項

【教育】

①これまで不足していた分野に教員を補充することができ、修士課程の論文指導体制が整ってきたことで、より学生の希望に沿った指導が行えるようになってきている。

【学生指導】

①春学期を利用して初年度生対象に改めて論文の書き方、論文の探し方などについて、基本から徹底して指導をおこなうことで、次年度の論文執筆にスムーズに移行できるよう指導を行った。

【社会貢献】

①各教員が各自の分野において活動を行い、学会運営活動や地域連携事業への参加などを行っている。

【組織マネジメント】

- ①不足していたマーケティング、会計学関連分野に専任教員が補充されたことで、大学院の講義の幅が広がるとともに、安定した運用が可能となった。
- ②大学院受験生の増加のため、大学院受験準備対策の教育機関に出向き、本学大学院を紹介して回った。
- ③新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、学生の所在確認や渡航の有無などの確認を行った。

(2)今後の課題

【教育・学生指導】

- ①論文の質を高めるために1年次の論文指導を踏まえて、これまで以上に学生個々の能力、意識、興味等の方向制を的確に捉えた指導が求められる。
- ②新型コロナウイルス感染症の拡大によって、遠隔授業となる場合の指導体制の強化や指導方法の情報共有が求められる。

【社会貢献】

①各教員が各自の分野において引き続き研究活動を行い、研究成果、活動成果を発表していく。

【組織マネジメント】

- ①今後の研究科の安定的な運用のため、依然として不足している分野への教員の確保を目指す必要がある。
- ②大学院受験者数および入学者数を増加させるため、本学大学院に関する情報発信を実施していく必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	経営学専攻
評価対象年度			2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	専攻主任		
	氏名	伊藤 利佳		
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①学生の学力レベル、意欲が向上してきた。</p> <p>②社会人、留学生の受け入れを考慮した時間帯に授業を設定することで幅広い学生の受け入れを可能にしている。</p> <p>③個々が自らテーマを探せるよう学生の自主性を促す教育の実施。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①社会人学生および日本人学生の増加を見込めるような魅力ある実践的な教育の実施。</p>			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①アルバイトをしている学生が多いため、授業や研究とのバランスをとるよう指導。(夜間など無理な時間帯、時間数などは避けるように指導。)</p> <p>②やむを得ず学期中に所用で一時帰国する留学生に対しては適宜配慮して対応。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①特別に問題になる事案は発生していないが、今後留学生が増えた場合には、さらにきめ細かい対応が必要になる。</p>			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①学会活動や論文査読の実施。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>②他大学や他機関との連携をはかる。</p>			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①他の先生方に協力していただけているため、スムーズな研究科運営体制がとれた。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①研究活動などに有意義に時間が使えるよう無駄な作業は削り、効率的な運営を目指したい。</p>			
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>特になし</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>特になし</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科(博士)用評価シート	組織名称 (評価单位名称)	経営学研究科(博士後期課程)
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	研究科長	
	氏名	伊藤 利佳	

自己評価 ※箇条書きにて記入

(1)特筆すべき事項

①会計科目の教員が補充されたため、社会人学生に対しても質の高い教育を実施することができている。

(2)今後の課題

特になし

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価单位名称)	生涯福祉研究科
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	研究科長	
	氏名	六波羅 詩朗	

(1)特筆すべき事項

①ワーキンググループによる検討

新たな形で、生涯福祉研究科の入学生の増加を目指して、2年前から研究科の課題を討議するワーキンググループを設置し、今年度は、他大学大学院の情報収集を含めてその状況等を参考に具体的な入学制度の検討、とりわけ入試形態の検討や入学試験の方法などについて検討していく。

【研究指導の強化】

①倫理審査の仕組みと申請に関わる講義

修士論文の作成予定の大学院生に対し倫理審査委員の教員が、倫理審査の仕組みと申請方法を丁寧に説明し、院生自らが申請できるよう情報提供を行った。

②ハラスメント対応

院生の修士論文指導などにおいて、ハラスメントと受け取られかねないような言動に注意すること、入学を許可した院生は、論文指導教員だけではなく、研究科全体で指導する意識を持つことを申し合わせた。

【他研究科との連携】

①リハビリテーション学研究科の授業の聴講

一昨年以降、リハビリテーション学研究科の配慮で、研究法を担当される木下康仁立教大学教授「修正版グランデッドセオリー」の講義を院生・教員が受講できる機会を得ることが出来た。

②他研究科との時間割情報の共有化

臨床心理士の資格科目との関係から心理学研究科の科目を取得できるように時間割の調整を行った。また、例年と同様リハビリテーション学研究科と時間割情報を共有し、院生が受講できないことのないよう、また、資格取得に不利益が生じないよう連携して時間割の作成を行っている。

(2)今後の課題

【応募者・入学者数の確保】

①生涯福祉研究科の魅力を周知する活動

生涯福祉研究科の魅力を周知するために、積極的に公開シンポジウムや公開講義を実施していきたい。
新しいパンフレットの作成や大学院のホームページの刷新などを行うことを通して、より具体的に学生、卒業生、院生、他大学、実習施設、地域の社会福祉施設などへ積極的にチラシなどの配布を行いたい。特に、コロナの感染拡大という状況にあるが、目白大学で開催される福祉関連のイベントの機会を利用して協賛するほか、リハビリテーション研究科との連携を積極的にとっていきたい。

②人間福祉、こども両学科の卒業生へリカレントの周知

学部学生に対して早い時期から大学院があることを周知する、既卒者へは学科のニュースレターや同窓会報などを通して働きながら大学院へのリカレント教育の見地からの視点も含め、入学者の確保につながる努力を行っていく。

③福祉施設と連携して社会人入学者の確保策を検討する

実習等に協力していただいている福祉施設との情報交換や連携を通して、大学(院)と福祉施設、福祉施設から職員を派遣できる仕組みを検討する。

④資格のキャリアアップに応える仕組みを検討する

認定社会福祉士認証・認定機構へ認定社会福祉士の資格取得に関わる大学院の科目の認証申請を検討する。

【大学院教育】

①図書購入費の活用

教員の図書購入の周知が不十分なこともあり、図書費の活用が不十分なことから、図書館の協力を得ながら一層の図書の購入を推進する。

②大学院教育

生涯福祉研究科の基本的な内容を含めて、社会福祉学および保育学の視点から教員の担当科目との調整や新たな講義などの検討をしていくことが急務と考える。さらに、その見地から、教員の研究粗銅体制、カリキュラムの充実、修士論文の在り方等について検討することが必要である。

③倫理審査のスケジュールの検討及び調整

修士論文の準備段階における倫理審査のスケジュールの時間的ずれが生じており、調査等に関する実際のデータ収集などに必要な倫理審査が時間的に余裕を持って出来る態勢が整えられつつあるので、これに対応した修論の指導体制の整備を行う。

【研究科組織と運営】

①教員人事

教員配置に大きな変化があり、さらに定年などによる退職によって、現在の大学院担当教員の人員及び専門的科目の担当内容が限界に来ている。同時に、元々、各学科の教員が大学院の教員として担当していることを考えると、学部の人事との調整も今後必要となる。とくに、定年退職者の講義科目の補充については早急の課題として取り組む必要がある。

②研究科会議や役割など、大学院の構成メンバーが、それぞれ役割を担いながら適切な運営を行うことが必要となる。

同時に、科目の充実と教員の負担、非常勤講師の年齢などの問題が生じてきており、これらの課題は研究科として至急検討すべき内容である。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	生涯福祉専攻
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	専攻主任	
	氏名	青木 豊	

項目	自己評価 ※箇条書きにて記入
----	----------------

教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①教育全般について 本研究科の教育は、一貫して生涯福祉という観点が貫かれてきた。すなわち保育学から老人福祉学にいたる生涯発達を哲学としようとしていた。実際、カリキュラムは、乳幼児から死にいたる発達の側面から学習・考察することを助けるように、系統的に授業が配置されている。この側面は、本研究科に特記すべき特徴である。一方、2019年度に、この理念は維持しつつも、昨年度個々の研究指導などにおいて、新たな教育、研究方略が立てられた。この点は、学生指導、組織マネジメントの項目に記載する。</p> <p>②個別の事項 i) 2019年度は学生の受験はあったものの、合格者がなく、したがって入学者がなかった。2年生以上の学生への講義や研究指導は、従来どおり続けられた。 ii) また上記哲学に従って、いくつかの公開講座、公開講義を主催あるいは共催した。1つは、子ども学科との共催の「保育者のキャリア発達—働き続ける保育者を支える—」をテーマとしたものである。公開講義は当研究科主催で実施された。これらテーマは福祉と発達の視点が含まれており、学生もこれらに参加させることができ有意義であった。</p> <p>(2)今後の課題 ①学生のリクルートが大きな課題となる。2020年度には1人の目白大学出身の学生が入科した。現在すでに議論されているが、更に学生数を増やす対策が必要である。 ②もう1つ大きな課題は、研究科教員とくに人間福祉学科職員の退職に伴う、教員の補充をどのように行うかである。福祉学として主要な科目を、非常勤の先生に担当していただくざるを得ない状況である。学科人事との連携、学園との調整が求められる。</p>
----	--

学生指導	<p>(1)特筆すべき事項 個別の指導に加えて教員全体が学生の研究を支援する。年間2回の研究デザイン発表会と中間発表会が行われる。その際、学生は自身の研究について指導教員以外の教員と研究科全体の学生との議論の機会を得る。デザインの洗練化、現実性を高めること、さらには学生の研究についての動機を高める機能がある。またその機会に、生涯発達の視点も議論される。一方、人間福祉学的視点と保育学的視点を、融合することは、困難であるため、個々の生徒はそのテーマに沿って、指導教員に個々の分野の知見を深め、研究を進める。</p> <p>(2)今後の課題 ① デザイン発表会での課題 デザイン発表会で、先行研究のられつで自分の発表時間を使い果たしてしまう学生も多い。デザイン発表や中間発表をより充実したものにするために、事前の個々の指導教官の発表に対する教育をより強化する必要がある。 ② 留学生の日本語能力に対する対策 これまでの努力されてきたが入試時点での留学生の日本語能力にたいする評価をより高める目標を掲げ実践した。その結果、留学生については残念ながら入試において合格に判断をすることができなかった。</p>
------	--

社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項 ①公開講座・講義の実行 すでに記したように1年に計4つの公開講座と公開講義を行った。もちろん公開していたため本学科の教育哲学にのっとった公開講座・講義を実行し、地域の福祉職の方々や住民の教育・啓蒙に貢献した。 ②大学が新宿区と福祉分野で協定を結んでいる。</p> <p>(2)今後の課題 とくに②の地域連携協定をより生かした、当研究科の貢献が期待される。</p>
------	---

組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項 2019年度に生涯福祉という学問哲学的視点と、研究科の運用的視点を独立・平行して捉える戦略を作った。というのも、学問的・研究的視点からは発達を軸とした生涯発達の視点は、より重要性を増しているように思える。一方、学生のリクルートの際に、同視点を強調するあまり、人間福祉学や保育学を学びたい受験生にとって研究科がどのようなことを行っているかが判明しがたく、受験生が集まりにくい要因の1つを作っているからである。またこの運作的視点によって、従来から大きくはそのようにはなっていたが、研究科内での役割の分担などを、人間福祉学科教員と子ども学科教員で振り分け協同することをより明確な形で行うこととした。</p> <p>(2)今後の課題 上に述べた学問的視点と運作的視点をともに機能させ、研究科内での役割分担をより円滑にし、とくに学生のリクルートを広報を含め、以前の方針を修正する必要がある。</p>
----------	--

その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>(2)今後の課題</p>
-----	-----------------------------------

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価単位名称)	言語文化研究科
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	研究科長	
	氏名	今野 裕之	

(1)特筆すべき事項

英語・英語教育専攻は残念ながら2021年度から募集停止となったが、日本語・日本語教育専攻および中国・韓国言語文化専攻においては、3方針に基づく着実な教育活動が継続されている。

各専攻とも、所属教員の研究活動及び社会貢献活動が活発に行われ、研究水準・社会貢献機能・研究指導力の充実が十分にはかられていると言える。

(2)今後の課題

現代の大学院においては、大学院修了後のキャリアパスを見据えた「募集－教育－進路支援」活動が求められており、英語・英語教育専攻の再生や博士課程の設置に着手する際には、強力なキャリアパス支援機能を実現させる必要がある。

研究科の活性化のため、学生募集の強化すなわち入学者増を図る必要がある。しかしながら、修士課程在籍者が全国的に漸減している現状から考えて、特定の層に特化した募集戦略では安定して入学者を確保できるか疑問である。したがって、①社会人・実務経験者、②本学卒業生、③他大学新卒者、④留学生のいずれの層からもまんべんなく入学者がいるような大学院（募集）の在り方を検討する必要がある。特に、本学卒業生にとって魅力のある大学院の在り方の検討が喫緊の課題である。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価单位名称)	英語・英語教育専攻
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	専攻主任	
	氏名	時本 真吾	

項目	自己評価 ※箇条書きにて記入
教育	<p>(1)特筆すべき事項 ①修了した学生は無く、入学者も無かったため、在籍者が無い状況である。</p> <p>(2)今後の課題 ①急激な少子化が背景ある現代、研究科での研究成果がキャリアパスにつながらない現状があり、研究科の存在意義が問われている。また、本専攻は、英語関連の大学院が乱立する中で、特色を発揮できていないと考えなくてはならない。</p>
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項 ①英語・英語教育専攻は多くの教員によって運営されているので、きめ細やかな指導が可能だが、残念ながら在籍者が無く、特徴を活かせていない。 但し、他専攻学生の英語・英語教育専攻科目の受講が数名あることは喜ばしい。</p> <p>(2)今後の課題 ①学生募集の停止が決定しているため、現代社会の要請に応える人材育成目標とカリキュラムを再考し、再起を図りたい。</p>
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項 ①専攻教員が国内外の英語・英語教育関連学会、学校法人、社会福祉法人において理事、監事、評議員等として運営に尽力している (3件)。 ②専攻教員により英語教育・言語文化関連図書が出版されている (2件)。 ③専攻教員により海外の査読付き学術誌に論文が発表されている (2件)。 ④専攻教員により国際学会のproceedingsに論文が発表されている (1件)。 ⑤専攻教員により国際学会での研究発表が行われている (4件)。 ⑥専攻教員により国内学会での招待講演が行われている (1件)。 ⑦専攻教員により国内外の投稿論文査読が行われている (国内1件、海外3件)。 ⑧専攻教員が英語教育に関わる産学連携研究を行っている (1件)。 ⑨ペンシルベニア大学バトラー後藤裕子教授を招き、早期英語教育を話題とした公開講演会を開催し、専攻教員も話題を提供した。</p> <p>(2)今後の課題 ①専攻教員の社会貢献は堅調と判断できるので、この状態を維持したい。</p>
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項 ①専攻在籍者が無いため、閉講となる授業が多い。</p> <p>(2)今後の課題 ①修士課程の再設置申請へ向けて、人材育成目標、専攻の存在意義を現代的視点から再検討したい。</p>
その他	<p>(1)特筆すべき事項 ①専攻教員による複数の研究課題が科学研究費補助金を獲得している (3件)。</p> <p>(2)今後の課題</p>

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	日本語・日本語教育専攻
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	専攻主任	
	氏名	池田 広子	

項目	自己評価 ※箇条書きにて記入
教育	<p>(1)特筆すべき事項 ゼミでは院生(長期履修含む)、研究生、交換留学生(中国:同済大学、華東理工大学)が交じり合って授業が行われていたが、多様な学生と意見交換をすることによって、さまざまな角度から考えることができていた。特にお互いに支え合い、ともに学び合う関係ができあがっていたことは、何よりの収穫だったと言える。</p> <p>(2)今後の課題 交換留学生のニーズにおいて「日本文学」を学びたいという回答が複数みられたため、来年度からはこれに対応できるように、人事、科目の配置の検討を行いたい。</p>
学生指導	<p>(1)特筆すべき項目 ①3月に提出された7本の修士論文は、必要性の高いテーマであっただけでなく、独自性、論理性もあり、高い評価を与えることのできる論文であった。 ②留学生の入試については、2019年度から継続して入学願書の要件に日本語能力試験1級または2級を求めることを徹底している。 また、面接試験では簡易版ACT FL OPIで口頭能力を援用して日本語能力も測定している。 これら2つのことを定めることにより、日本語力が支障となって、指導が滞ることがなくなった。 また、質の高い授業もできるようになった。</p> <p>(2)今後の課題 ①修士論文で院生が取り組んでいる(取り組んだ)テーマが学会誌や研究誌などに掲載されるように、サポート体制をつくる必要がある。</p>
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項 ①日本語教育学会の編集委員として、学会誌『日本語教育』の特集号のチーフを担当し、企画、寄稿論文の依頼、査読及び一般応募の査読などを行った。また、大会委員会副会長として秋の学会の大会開催に貢献した。 ②教員がお茶の水女子大学大学院博士論文外部審査員として出席(2回)し、博士論文の助言・指導をおこなった。 ③教員が「学びを培う教師コミュニティ研究会」の会長として、ベトナム・ハノイの日本語教育関係者や上海近郊の大学日本語教員を対象にラウンドテーブル型教師研修を企画・実施した。 ④教員がベトナムおよびインドネシアにて基調講演を行った。</p> <p>(2)今後の課題 地域に開かれた大学として、目白大学近郊の小学校・中学校、日本語学校などと大学院レベルで連携していく道を模索する必要がある。</p>
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>(2)今後の課題</p>
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>(2)今後の課題 目白大学大学院の特徴を生かした博士課程を設置することによって、競合となる他大学院との差別化を図る道を模索する必要がある。博士課程を設置することによって、東南アジアの院生(留学生)のキャリアパスを実現化していきたい。</p>

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	中国・韓国言語文化専攻
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	専攻主任	
	氏名	胎中 千鶴	

項目	自己評価 ※箇条書きにて記入
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①中国言語文化分野、韓国言語文化分野ともに、修士の学位を授与するための安定的な体制がそれぞれ維持されている。</p> <p>②中国・韓国研究を主軸としつつも、「東アジア」全体を視野に入れた横断的な研究活動を可能とする科目が設置されている。</p> <p>③中期計画では、「東アジア」の視点を拡大する方向性を重視したうえで、「学際カリキュラム」の設置が求められており、今年度はその導入に至った。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①中期計画では、中国言語文化分野と韓国言語文化分野の分離と独立、および博士課程の設置に向けた検討が求められている。</p>
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①韓国言語文化分野から3名の学位取得者があった。</p> <p>②遠隔地に勤務する社会人や、体調不良で長期欠席が続く学生に対しても、きめ細やかなフォローアップをおこなった。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①学位授与に値する学生をより多く育成するためにも、学会参加などの積極的な研究活動を促す必要がある。</p>
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①所属教員は、それぞれ国内外における講演や著書出版などを通じて、一般市民に向けた研究成果のアウトプットを展開している。</p> <p>②所属教員が、スピーチコンテストの審査員、検定試験の各種業務、教職免許更新講習講師などを務めている。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①国内外での社会貢献活動をさらに活発化させるために、引き続き各教員の多角的な学術的発信力が求められる。</p>
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①中国・韓国両分野ともに、修士論文中間発表会や最終試験の実施が円滑におこなわれている。</p> <p>②今年度も入学試験は滞りなく実施された。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①両分野の分離と博士課程設置の実現に向けて、引き続き検討をおこなう必要がある。</p> <p>②入学定員の充足をはかるべく各方面での工夫や努力が求められる。</p>
その他	<p>(1)特筆すべき事項 特になし</p> <p>(2)今後の課題 特になし</p>

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価単位名称)	看護学研究科
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	研究科長	
	氏名	安齋 ひとみ	

(1)特筆すべき事項

【教育課程】

- ①修士論文の評価基準の見直しおよび修士論文の審査方法について、研究科教務委員会で検討した。研究科委員会の審議・承認を得て、修士論文の評価基準を学生ネットに公表し周知した。公平な修士論文の審査を行うために、指導教員と異なる教員を論文審査の主査とする審査体制を導入し、共通の修士論文審査基準による論文審査を実施した。
- ②精度の高い修士論文を院生が作成できるよう研究計画書の審査内容を検討した。

【学生指導・入学者選抜】

- ①入学時オリエンテーション時、および学年進行時(4月)に教務委員より学生便覧による年間行事予定およびコースアウトラインの説明を行い、計画的に論文作成ができるよう指導した。
- ②入試の受験生を確保するために、入試広報課の協力のもと、看護学研究科受験生相談専用メールを作成し、随時、メールでの相談を受けることができるように研究科内の体制を整えた。受験生からのメールは、研究科長、研究科主任、3分野長、看護学研究科入試委員長が同時に受信できるシステムとなり、利便性が高くタイムリーな相談が可能となった。第Ⅲ入試の受験生確保に繋がった。

【社会貢献】

- ①看護学研究科修了生は100名を超えた。10月に修了生の会総会時に研究科長と研究科専攻主任が参加し、受験生確保のため、修了生の職場等への受験生紹介を依頼した。
- ②看護学研究科の教員が社会貢献による講演を行う際に、看護学研究科別刷りチラシを持参し、研究科のPRと受験生確保を合わせて行った。

【組織マネジメント】

- ①2018年度の年度途中で論文指導をする教員を変えてほしいと相談のあった院生について、2019年度より別の教員が学生を担当し指導した。修士論文を完成し修了した。
- ②2019年度中期計画の立案・評価を大学に報告した。
- ③研究科退職教員の後任となる研究指導教員の確保のため、学科教員審査委員に研究科長が参加し学科教員確保と研究科教員確保を重ねて検討し、研究科必要教員数を確保した。

(2)今後の課題

【教育課程】

- 令和2年度より、研究科として研究計画書の審査体制をつくり研究計画書の審査を実施することを決定した。
令和2年度に研究計画書の審査申請手続きや体制を定め審査を実施する。

【学生指導】

修士論文提出前の12月に論文発表会実施時において発表内容が論文審査基準を満たしているかを研究科教員全員で審議・検討した結果、令和2年度より発表会の時期を修士論文審査合格後に行うことを決定した。令和3年1月に、修士論文を提出者で論文審査合格者に対し、研究発表会を年間行事予定に掲げ実施する。

【入学者選抜】

受験生確保が1名のみであり、受験生確保は緊迫した課題である。令和2年度は仕事と大学院の両立が可能な大学院として広く積極的にPRしていく必要がある。看護学部卒業生への周知、大学院受験専門誌・看護系専門学術雑誌に受験生確保の広告掲載等、入試広報課の協力を得て積極的な受験生確保策と、経験年数の緩和などの受験しやすい条件を整えていくことが急務である。

【組織マネジメント】

- ①2018年度より国立埼玉病院キャンパスの事務室職員数が減ったことにより、年間計画に沿った教務業務及び学生業務に支障を生じさせないよう教員の負担は大きくなり、負担が経年的に継続していることから教員が疲弊していることが問題になっている。
- ②退職教員が複数おられたことにより、大学院を新たに担当する教員が多く、教員の研究分野の専門性や3分野の教員配置にアンバランスが生じてきている。修士論文を指導できる学部教員の確保と育成が必須であり、教員の研究分野の専門性を考慮した学部人事の採用計画への反映が必要である。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	看護学専攻
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	専攻主任	
	氏名	辰島 美佐江	

項目	自己評価 ※箇条書きにて記入
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①修士論文の評価基準について検討し、それに基づき修士論文審査を実施した。 (ア)客観的に修士論文を評価できるように、修士論文の評価基準を見直した。 (イ)修士論文の審査方法を整備した。 (ウ)主査及び審査員となる教員に、修士論文の評価基準と審査方法を周知した。</p> <p>②研究計画書の評価基準を作成し、研究計画書の審査方法を検討した。 (ア)精度の高い修士論文を作成するために、研究計画書の段階から客観的に評価するよう、研究計画書の評価基準を作成した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①令和2年度より、研究計画書の審査方法を導入し、精度の高い修士論文を作成できるように審査体制を整備する。</p>
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①計画的な修士論文作成に向け、入学オリエンテーション時、教務委員が学生便覧に基づいて年間行事予定およびコースアウトラインの説明を行った。 ②指導教員が、院生の個別状況に基づいて、計画的に修士論文を作成できるように指導した。 ③院生の中には、修士論文の発表会后、大幅に修士論文を修正する必要性が生じたため、修正した修士論文を提出できず、修士論文の最終試験を受けられず、修了を延期した院生が数名いた。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①修士論文の発表会后1か月足らずにて修士論文を提出し、口頭試問を受けるため、十分に検討した修士論文を提出することが困難な院生が少なくなかった。今後は、修士論文の口頭試問を通過した院生が、修士論文の発表会（最終試験）に進める体制を整備する。</p>
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>(2)今後の課題</p>
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①「令和元年度看護学研究科組織運営および教員役割」を4月の研究科委員会で決定し、年間運営した。3分野長会議、教務委員会、学生支援委員会、入試広報委員会など、役割と分掌範囲を明確化を試みた。既存の方法にて論文構想発表会の時間配分、学位論文審査判定時の主査・副査の配置などについて、各委員会で検討し研究科委員会で決定することはできた。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①国立埼玉キャンパスの事務室体制が常勤職員1名のため、研究科委員会の議題の事前調整、委員会資料の作成、特別講義時の準備などへの事務室の協力が得られ難くなった。教員の本拠地が「さいたま岩槻キャンパス」のため、MUSC事務室との調整に工夫を必要とし、教員の負担が増加している。</p>
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①入学生確保対策として、入試広報課の協力のもと、入学案内別刷を印刷し、受験希望者個々に届くよう看護系大学、病院、保健所、市町村に送付した。 ②仕事をしている看護職者が相談しやすいように、入試相談日を随時設定した。しかし、受験生確保に繋がらず入学生は1人に留まった(定員15人)。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①入学生確保に向け、草の根運動の必要性がある。具体的には、看護学部卒業生への大学院紹介、教員からの個別の働きかけを試みる必要がある。</p>

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価单位名称)	リハビリテーション学研究科
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	研究科長	
	氏名	内山 千鶴子	

(1)特筆すべき事項

教育に関しては、PTOT指定規則の変更に伴い、専任教員の要件として必要な教育関連科目を設置するようカリキュラム変更を申請し認められた。新設科目は教育原理 2単位、リハビリテーション教育方法特論 2単位でどちらも担当教員を選定した。教育原理は人間学部児童教育学科の醍醐身奈先生、リハビリテーション教育方法特論は東京慈恵会医科大学教育センター長福島統先生にお願いできた。来年度から開設される。

修士論文指導において、構想発表会(5月)、中間発表会(11月)、最終発表会(2月)を実施、最終試験に長期履修(3年)生を含む2名の学生が受験・合格し修士の学位を取得した。また、研究科開設以来初めて9月修了予定の学生が2名在学した。1名は論文再提出、1名は長期履修の後、7月の最終試験に合格して9月に学位を取得した。

研究を促進するため、修士論文の評価方法を検討しルーブリックによる評価を実施することにした。また、主査、副査の役割と時期を含めた研究の進め方を検討した。これらは、学生便覧に明記し、2020年入学生より開始することになった。研究発表に関しては、修士生を引き続き指導し、発表や投稿に繋げ掲載に至っている。

會田玉美教授が中心となり、同教授の科研費でDr. Alan Weintraub氏を招聘し、「アメリカにおける頭部外傷リハビリテーションの実践と研究」の講演会を筑波大学と共催で開催した。(會田玉美 科学研究費助成金基盤研究(C)高次脳機能障害者の社会参加を促進する教育用VTRの作成とその効果、日本リハビリテーション連携科学学会研究推進委員会・筑波大学生涯発達科学専攻・目白大学大学院リハビリテーション学専攻共催、筑波大学人間総合科学研究科戦略プロジェクト(2019年度国際・社会連携教育推進プロジェクト)令和2年1月26日(日)筑波大学文京校舎 432教室)さらに、The 4th World Disability and Rehabilitation Conference (WDRC 2019)のAcademic partnerとなり、07-08th NovemberにBangkokで開催された同学会に2名が参加した(内1名はWEB参加)。

社会貢献としては、リハビリテーション学研究科主催の公開フォーラムを11月に開催し、外部講師に東京福祉大学、先崎章先生にお願いした。演題「認知症・精神疾患・高次脳機能障害どう違うの?どう対応するの?地域包括ケアシステム構築に向けPT・OT・STは何をなすべきなのか?」について講演いただいた。80人程度の参加だった。参加者からのアンケートでは意義な講演であったと感想をいただいた。なお、この会で大学院の広報を行った。

組織マネジメントとしては、毎月、保健医療学部教授会の前後にリハビリテーション学研究科委員会を開催して(計11回)、情報の共有を図った。教務委員と入試広報委員を各学科2名決め、合同で月1~2回委員会を開催し(計12回)、研究科運営に関わる企画立案、推進を担当した。研究科予算の立案、執行について研究科長・専攻主任を補佐する担当教員を置き進めた。岩槻キャンパスでの予算関係事務が可能になりより円滑な予算執行を実現できた。

その他、受験生確保、入学生の専攻分野のアンバランスの解消を目指して、関東の理学療法、作業療法、言語聴覚療法養成校へ大学院案内を送付あるいは持参して広報した。また、学部の4年生学生へ、目白大学の学部及び大学院修士課程を修了した方に講演していただき、大学院で学習することの意義を説明した。入学者を増加させる目的で、入学要件の拡大を図るよう研究科内で検討した。教育の目的、AP・CP・DPを作成し直し、カリキュラムに関しても検討した。

(2)今後の課題

- ①来年度より教育に関する科目が4単位新設される。学生の履修動向を観察し、将来教員を希望する学生のために履修を指導する。
- ②新しい修士論文の指導と評価と進め方を設定したので、2020年度入学生の研究の進め方に注目し効果を判定したい。特に、ルーブリック評価で学生が何をなすべきか理解できるかどうか検討していく予定である。
- ③公開フォーラムに関してはより広報効果を増し、参加者が増大するようにリハビリテーション関連職種の興味関心を考えた講演内容にする予定である。また、教員FDの場とすることにした。
- ④学生確保のためにも、学部生に大学院の広報を来年も実施する予定である。
- ⑤リハビリテーション3分野(理学療法、作業療法、言語聴覚療法)を基盤とした修士課程学生確保と博士後期課程設置に向けた基礎資料を集めることは継続して行う。
- ⑥入学要件の拡大に関して他研究科との意見交換は必要であると考えられるので、調整を進めたい。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価单位名称)	リハビリテーション学専攻
評価対象年度		2019年度		
記入者 (評価単位責任者)	職名		専攻主任	
	氏名		時田 みどり	
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①修士論文の審査過程について、審査委員会の設置やルーブリックの作成を行うなど、基準やプロセスを明確化した。</p> <p>②より高度な統計手法を紹介するために、外部講師による統計講義を開催した。</p> <p>③生涯福祉学研究科、看護学研究科とのFD科目として、特別教育支援特論を指定した。</p> <p>④カリキュラムの変更を行い、教育関連科目の充実を図った。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①遠隔授業を含め、多様な学習環境の整備をすすめる。</p> <p>②入学資格者の変更にともなうカリキュラムの拡充をすすめる。</p>			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①修士論文指導において、構想発表会（5月）、中間発表会（11月）、最終発表会（2月）を実施し、最終試験を経て2名が修士学位を取得した。</p> <p>②1年次から実質的に論文指導を開始し、プレデザイン発表会を秋学期（11月ないし2月）に実施した後、「目白大学人及び動物を対とする研究に係る倫理審査委員会」への申請を行った。</p> <p>③研究の種類により、倫理審査を早急に申請する必要がある研究は研究科長に申し出て、5月以前にプレ構想発表会を5名の学生が実施できるようにした。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①1年次からの特別研究の指導開始により、1年生からの指導を充実するとともに、2年生との研究的交流を活発にしたい。</p> <p>②対面での指導の他に、遠隔での面談授業や個別指導の環境整備をすすめる。</p>			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①11月に、リハビリテーション学研究科主催の公開フォーラムを11月に開催し、東京福祉大学社会福祉学部の先崎章先生に「認知症・精神疾患・高次脳機能障害 どう違うの？ どう対応するの？ 地域包括ケアシステム構築に向け PT・OT・ST は何をすべきなのか？」というタイトルでご講演いただいた。50名を超える参加者を得た。</p> <p>②フォーラム、公開講演会等は生涯福祉研究科・看護学研究科と相互に協賛して実施した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①公開フォーラム開催を今後も継続し、学部生・院生の教育に資すると共に、社会貢献の機会としたい。</p> <p>②フォーラムの周知に関わる方法は改善を要する。</p> <p>③令和2年度は、実習教育に関する内容で公開フォーラムを開催する予定である。</p>			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①毎月、保健医療学部教授会の後、リハビリテーション学研究科委員会を開催して（計11回）、情報の共有を図った。</p> <p>②教務委員会と入試広報委員会は原則合同で月1～2回開催し（計12回）、研究科運営に関わる企画立案、推進を担当した。</p> <p>③研究科予算の立案、執行について研究科長・専攻主任を補佐する担当教員を置き、また予算関係事務が岩槻キャンパス庶務で可能になるよう申請して、予算執行体制の改善を図った。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①すべての教員が研究科委員会に参加し、活発に議論できるよう方策を検討する。</p>			
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①リハビリテーション学研究科修士課程の学生確保を目的として、入学資格要件の変更を検討し、PT・OT・ST以外の医療・福祉・介護・それらの教育に携わる者への門戸の方針について、研究科で議論を重ねた。</p> <p>②国際的な視野の拡充を目指して、大学院教員3名、学部教員2名が、World Disability & Rehabilitation Conference 2019に参加し、発表や交流を行った。</p> <p>③3月以降のCOVID-19の感染拡大に伴い、例年通りの修了証書及び修士論文の授与ができなかったため、郵送で行った。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①入学資格要件の変更に伴うカリキュラムの変更を実施する。</p> <p>②学部と連携して、学部生に研究科を紹介する機会を持つ。</p> <p>③遠隔による指導など、多様な教育手法の導入をすすめる。</p>			

学 部 · 学 科

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価单位名称)	人間学部
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	学部長	
	氏名	田尻 信壹	

(1)特筆すべき事項

【教育】

- ①人間学部は将来の職業を見据え、学科の特性に応じた免許・資格の取得を目的とした人材育成を目指している。そのため、各学科とも目的達成のために実習や演習、学科独自の行事に重きを置いた指導に努めてきた。2019年度もこれらのことが継承でき、「育てて送り出す」という本学の方針が実現できた(詳細については、各学科の自己点検評価表を参照)。
- ②心理カウンセリング学科が文科省から2020年度の新学部・学科(心理学部・心理カウンセリング学科)の設置を承認された。
- ③新しい3方針(AP、CP、DP)が策定され、3方針に基づく学生の受け入れ、教育、送り出しが明確化されるとともに新時代に対応した教育や指導方針が確立された。
- ④国語力に課題をもつ新生を対象に春学期に日本語講座を開講し、基礎学力の向上にむけての取り組みを行い成果を上げた。
- ⑤学部講演会が学部学生を対象に実施され、新宿区の多文化共生の状況が紹介された(2019年11月)。日本社会の多文化的状況を学ぶ機会が得られた意義は大きい。

【研究】

- ①学部所属の教員の論文が90(学会誌・紀要・他)、書籍刊行が41、学会発表が112に達するなど、充実した研究を達成できた。中でも海外誌への論文掲載が9、国際学会での発表が8など、国際的な広がり活躍が見られたことは特筆される。
- ②学内特別研究費を取得しての学科単位の研究や、学科独自のFDを定例化するなど、協働的な研究体制の確立が見られた。
- ③多くの教員が学内特別研究費、科研、その他受託研究費などの競争的資金の獲得に努めるなど、研究への積極的な取り組みが行われた。

【学生指導】

- ①「育てて送り出す」という本学の方針の実現に向けて、各学科ともキャリア教育の充実に努めた。その結果、人間学部では高い就職内定率を達成できた。
- ②教員が障がい学生に対する情報を共有することで、障がい学生に配慮したきめ細かな指導に努めることができた。

【社会貢献】

- ①各学科とも、学科の特性を生かした社会貢献に努め、多大な成果を上げた。学部全体では「学会、協会役員等」54、「国・地方公共団体等委員」32、「地域連携事業」44、「産学連携事業」16、「高大連携事業」4、「その他社会貢献事業」79の総計229に達した。2019年度の人間学部教員の社会貢献は、質、量ともに大きな広がりを見せた(詳細については、各学科の自己点検評価表を参照)。
- ②人間学部の社会貢献の特徴として、学生たちが教員の指導のもと活動に参加する事例が多数見られた(新宿区小学校でのメンタルヘルス・ボランティア、新宿区高齢者福祉施設での活動、近隣園・小学校への学生ボランティアの派遣など)。

【組織マネジメント】

- ①正規教員と非常勤教員との懇話会を学部主催で開催し、非常勤教員への学生指導や教務関係についての周知と教員相互の親睦を深めることができた(2019年5月)。そのことが、学部としての一体感の醸成につながった。
- ②3資格課程を中心とした教員間の連携(福祉)、実習業務内容の検討(子ども)、学科会議の月2回開催(児教)など、学科長のリーダーシップのもとでのきめ細かな学科運営が組織の活性化につながった。
- ③学科長のリーダーシップと学科教員のコンセンサスのもと、教員の長期研修制度を利用した研修(1年間)が決まった(心理)。このことが学科の活性化と教員のモチベーションを高めることにつながった。

【その他】

- ①実習中でのトラブル、商取引への関与疑惑など学生をめぐる問題が発生したが、学科と学生課、教務課、大学事務局等との連携のもとに迅速に対応することができた。

(2)今後の課題

【教育】

- ①従順であるが、主体性に欠けたり自分に関係ないことには無関心を示したりする学生が増加してきた。学生の意識を変革していくための教育方法の研究と、学生の特性に配慮したきめ細かな指導体制を確立していくことが課題である。
- ②各種国家試験、教採試験などの合格率や合格者数に対する社会の関心が高まっている。この状況に過度に迎合することは慎まねばならないが、学部運営上、その期待に応えることは重要である。そのため、学生の進路実現と進路保証の面から検討し、学生の意識改革と学力向上に向けて学習環境(と広報活動)を整備していくことが必要である。
- ③近年の傾向として、学生の就職意識の多様化が進んでいる。資格や免許の取得を目指さない学生が現れてきた。このような学生に対するキャリア教育の充実が喫緊の課題となっている。

【研究】

- ①若手教員が増加の傾向にあり、研究意欲も高い。若手教員への期待に応えるために、共同研究や競争的資金の獲得などの研究支援体制や研究環境の一層の整備が必要となっている。
- ②今後は、業績プロを活用しての研究のデータベース化を推進することで、研究の可視化と共有化を進め、協働的な研究体制を確立することが重要である。

【学生指導】

- ①近年、学生のアルバイトへの過度の関与が目立っている。学部・学科行事やゼミ活動への支障ばかりでなく、学習意欲の低下も指摘される。各学科においては面談を充実させ学生の実態把握に努めるとともに、学生に対しての適切な助言を行える環境をつくる必要がある。
- ②近年、心身の健康状態が心配な学生が増加してきた。学部、学科、学年(ゼミ、クラス)間で学生情報を共有し、保護者への速やかな連絡を含め、学生に対するきめ細やかな指導体制の確立が必要である。

【組織マネジメント】

- ①従前から会議数の増加や長時間化などの課題が指摘されてきた。遠隔会議が普及し、遠隔会議が対面での会議を補填できることが確認できた。ポストコロナ時代に入っても、一程の頻度で遠隔会議を実施することで会議の効率化を進める必要がある。
- ②教育、研究、地域貢献など業績のデータベース化が必要となっている。また、そこに蓄積されたデータの資格審査や学科分掌の割り当て等での活用を検討していく必要がある。
- ③各学科では、ここ数年の間に定年退職者が継続的に発生する。適正な教員構成に向けての中・長期的展望をもった人事計画を策定することが求められる。

【その他】

- ①学生の多様化に伴い、これまで予想されなかった様々な問題行動が発生してきた。このような学生の問題行動に対しての迅速な対応が求められている。そのため、学生への継続的な注意喚起と問題発生時の対応への学部・学科、学生委員会、学生課間の緊密な連携が必要である。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	心理カウンセリング学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>① 文部科学省より新学部・学科（心理学部・心理カウンセリング学科）設置が承認され、2020年4月開設に向けての準備を行った。</p> <p>② 2018年度入学者より、公認心理師資格対応のためカリキュラム改定を行い、2019年度は旧カリキュラムと現行カリキュラムの2ラインが同時走行しているが、来年度は新学部カリキュラムが加わり3ラインとなるため、混乱が生じないよう、確認作業を徹底した。</p> <p>③ 学科講演会を春学期1回、秋学期1回実施した。</p> <p>1) 2019年7月8日：「UNHCRの活動－特にメンタルヘルスと心理 社会的支援について」中村恵氏（NPO法人国連UNHCR協会）</p> <p>2) 2019年12月16日：「臨床心理学と社会一学問として、専門職としての視点から」高橋美保氏（東京大学大学院教育学研究科教授）</p> <p>④ 2021年度より公認心理師養成のための、保健医療、教育、福祉、司法・犯罪、産業・労働の5領域の実習が開始することに伴い、昨年度同様に実習先を開拓し、ゼミ単位で見学実習の試行を行った。</p> <p>⑤ 精神保健福祉士コース4年生の3名について、2名が国家試験に合格、1名が不合格であった。本コースの最終学年であり、今年度をもって本コースは廃止される。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>① 心理学部・心理カウンセリング学科開設に向け、引き続き準備を進めると共に、入学者確保のための入試対策を進めていく。</p>			
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>① 学会誌への投稿論文数が昨年度は大きく増加したが、今年度も昨年と同様の成果が見られた。昨年同様半数以上は国外誌であった。</p> <p>② 書籍等出版物については、ほぼ例年同様の成果であった。</p> <p>③ 学会発表件数については昨年度大きく増加したが、今年度はさらに多く、国際学会での発表5件を含む49件であった。</p> <p>④ 科学研究費補助金については、研究代表11件、分担研究8件であった。</p> <p>⑤ 特別研究費については、1名が科学研究費申請のための助成を受けた。</p> <p>⑥ その他の受託研究費獲得は2名であった。</p> <p>⑦ 学科内の複数教員による共同研究が行われた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>① 若手教員を中心に、積極的な研究活動が行われ、成果をあげている。個々の教員との面談では、研究時間をいかに確保するかの課題が毎年挙げられるが、個々の努力に負うところとなっている。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>① 就職内定率は、91.5%であった。前年は男子が84.0%と低かったが、男子95.5%、女子90.0%であった。</p> <p>② 本学科は大学院・専門学校への進学希望者が毎年20%前後であることが特徴的であるが、今年度は20名18%であった。</p> <p>③ 卒業者数は107名、卒業延期者は単位不足7名、在学4年未満3名休学中5名の計15名であった。</p> <p>④ 退学者は12名で、退学理由は進路変更が8名と多く、その他健康上の理由、経済的理由であった。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>① 就職活動の支援を、就職・キャリア委員の教員を中心に引き続き実施していく。</p> <p>② 大学院進学希望者のうち、本学心理学研究科臨床心理学専攻については、来年度より内部選抜入試を開始することとなった。修士課程は2年間と短いため、その後のキャリア形成についての指導も行っていく必要がある。</p> <p>③ 卒業延期者については、学生個々の事情に応じた対応を早期より、クラス担任・ゼミ担任を中心に引き続き行っていく。</p> <p>④ 心身の健康状態が不良な学生が各学年一定数おり、クラス担任・ゼミ担任を中心に、必要に応じて学科内で情報を共有し、保護者への連絡を含め、学生相談室や障がい等学生支援室と連携して対応していく必要がある。</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>① 3年生以上科目学校カウンセリング特講2・3（ピアサポートA・B）の授業では、新宿区と提携し、11名の学生（2年目の3名を含む）が区内の小学校にメンタルヘルス・ボランティアとして赴き、スクール・カウンセリングの補助を行い学校現場に貢献した。</p> <p>② 新宿区特別支援教育事業において、3名の専任教員が巡回指導を行った。</p> <p>③ 東京都・千葉県・埼玉県の高校5校について教員による出張授業を行った。また東京ビックサイトにて、教員による広報活動（夢ナビ）を行った。</p> <p>④ 来年度新カリキュラムである心理学体験実習A（ボランティア）におけるボランティア体験先の開拓を行った。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>① 授業として位置づけているメンタルサポート・ボランティアやボランティア体験を通して、学生の活動性を高める方法を検討する。</p> <p>② 新宿区特別支援教育事業での巡回指導を継続する。</p> <p>③ 目白研心高校との高大連携については、一部授業で実施しているが、今後の課題である。</p> <p>④ 高校の出張授業では、心理学の多様な面白さを高校生に伝える機会となるため、教員の負担とならない範囲で実践していく。</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>① 教授1名、助教1名、助手1名（臨床心理実習支援室）が4月より着任した。</p> <p>② 教授1名（定年）、准教授1名、特任専任講師2名（1名は精神保健福祉士コース担当者）が年度末に退職した。准教授後任の公募を行った。</p> <p>③ 准教授1名の昇格人事についての手続きが行われ、来年4月より教授に任用されることとなった。</p> <p>④ 教員の長期研修制度に1名が応募し、来年度1年間の長期研修が決まった。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>① 心理学部心理カウンセリング学科開設にむけて準備を行うとともに、人間学部心理カウンセリング学科からの円滑な移行をめざす。</p> <p>② 今後5年以内に5名の教授が定年退職となる。50代の教員が1名のみであり、昇格人事を含め教員構成の検討を継続して行っていく必要がある。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>① 精神保健福祉士コースの学生1名が病院実習中にトラブルに遭遇し、学科及び教務課・学生課・大学事務局とともに、本人および保護者、実習先との対応を行った。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>① 今後、公認心理師養成のための見学実習やボランティア体験等学生の地域社会活動を積極的に進めて行く中で、学生への事前教育の徹底と、問題が生じた場合の速やかな対応について検討を行っていくことが必要である。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	人間福祉学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項 社会福祉士課程、精神保健福祉士課程、介護福祉士課程の受験資格課程を中心とした教育の中で、現場で活躍できる人づくりをめざし、特に実習や演習に重点を置いた教育が実施できた。</p> <p>(2)今後の課題 社会福祉国家試験の合格率、及び合格者数の改善。また、受験資格取得を目指さない学生に対する学びの提供が不十分である。これらの課題に対して、令和3年度より実施される、社会福祉士及び精神保健福祉士課程のカリキュラム変更にあわせて制度の改善を目指す。</p>			
研究	<p>(1)特筆すべき事項 科研費を中心とした競争的研究費の取得が徐々に増加してきており、研究に対する環境が整ってきていると考えられる。</p> <p>(2)今後の課題 査読つき研究論文数と海外発表が十分ではないため、学科における研究の支援体制の構築が課題である。</p>			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項 人間福祉学専門セミナーおよび人間福祉学特別セミナーを中心とした少人数のきめ細やかな指導を、学科全体として行うことが出来た。また、学科内委員会である障害学生委員会において、障害学生に対する配慮をより細かく教員に周知することができた。</p> <p>(2)今後の課題 意欲を失い休学および退学にいたる学生が散見されており、学習にたいする意欲の維持・向上が課題と考えられる。この点に関しても、令和3年度から始まるカリキュラム改訂において、学生の意欲を向上させる制度面の見直しを目指す。</p>			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項 地域の福祉問題を扱う種々の団体において、多くの教員が参加し、地域貢献を行っている。</p> <p>(2)今後の課題 それぞれの教員の取り組みを教員同士でネットワークを作ることや、社会貢献に学生が参加する事例がまだ十分ではないため、学科内でこれらを促進する仕組み作りが課題である。</p>			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項 3資格課程を中心として、教員間の連携が十分にとれている。</p> <p>(2)今後の課題 資格課程間の連携は必ずしも十分ではなく、それぞれの課程における取り組みを教員全体がすべて把握しているとは言えないため、情報共有を活発にする仕組み作りが課題と言える。 また、令和3年度末に2人の教授が定年退職し、教授が3名まで減少するため、教員の業績獲得を後押しし、将来昇進を目指す人づくりが必要である。</p>			
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>(2)今後の課題</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	子ども学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①昨年度問題になった教室環境に関して、全教員が学科会議などを通して共通認識をし対応をしたことで問題を解決することができた。</p> <p>②大教室での授業に関しては、私語が増えやすく受講環境が悪くなりがちだったが、多くの教員が座席指定を行うなどの工夫をすることで以前より改善されている。</p> <p>③ボランティアに出ることを必修としている「子ども学基礎セミナー」について、ボランティア先との連携ができ始め、学生が良い経験ができる機会となった。また、ボランティア発表などを通して他者の経験を学ぶこともでき、特色のある科目として充実してきている。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①学科行事として取り組んでいる「まみむめじろ」の準備活動について、アルバイトなどの理由から参加者が激減してきている。経済的な理由があるため強制はできないので、学生の学びの機会としつつ経済的に困難にならない方法を模索したい。</p> <p>②大変なことをやりたがらない傾向や、成績に関係のないことをやりたがらない姿勢が学生にある。保育者の資質を育てるために必要な経験をどのような機会に積ませるかが課題である。教員間の協力も必要である。</p>			
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①今年度は実習支援室の助教2名が新たに着任したものの、多くの教員は業務に大きな変更がなかったためか、学会発表数、書籍などの出版が増加した。特に30～40代の教員の学会発表が多くなされたことは良かったと思う。</p> <p>②特別研究費を得て取り組んでいる卒業後調査について、ある程度の結果がまとまりつつある。公開講座にてアンケート結果を報告することができた。子ども学科生の卒業後の状況が見えてきているので、今後の学生教育にも活用できると考えている。</p> <p>③実習助教の業務が順調に進んでいることから、研究時間を少しづつ確保することができようになってきている。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①科研費を獲得する教員が一定数いるが、今後はこれまでに科研費を獲得していない教員も申請できるようにし、科研費の獲得数を増やしたい。</p> <p>②学科内で各教員の研究についてFDなどで発表しあう機会などを設け、教員間での共同研究を行ったり、新しい知見を得ることができるようになりたい。</p>			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①年度初めに、マルチ商法まがいの話が3年生の間で流行ったため学生に聞き取りをしたものの、はっきりとしたことは不明のままであった。しかし、学生課に情報共有をし、他学科での問題もあったことから学校からの注意喚起がなされた。</p> <p>②昨年度盗難事件があったピアノ個人練習室に防犯カメラが設置された。以前より使用マナーなども改善されてきているものの、徐々に使用マナーが悪化する傾向もみられるので、引き続き見回りが必要と思われる。</p> <p>③学費や生活費のためにアルバイトを多く入れている学生が増えつつある。また、アルバイトの内容についても幅が広がっており、学生生活に支障をきたして、休学や退学に至るケースもみられた。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①経済的に困窮している学生の生活状況を把握して、学業に支障をきたさないようにサポートする体制を考える必要がある。</p> <p>②手軽に高額が手に入るアルバイトに学生が向かってしまわないよう、年度初めや学期初めの機会に指導をする機会を設けたい。</p>			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①近隣園との交流、学生ボランティアの派遣などは例年通り多数実施してきた。御領神社の巨大絵馬作成、高齢者施設神楽坂でのワークショップなどは先方から期待されて毎年恒例になってきている。</p> <p>②西落合図書館における年2回のイベントは、今年度も好評を博していた。地域の親子にも認知されつつあり、参加者も増えている。その他にも四谷保健センター、ささえる薬王子でのボランティアに関しても大変評判が良かった。</p> <p>③近隣商店街との連携事業にも多くの学生が参加した。</p> <p>④各教員が様々な場での社会貢献活動をする機会が増えている。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①現在依頼されているボランティアに関しては、今後も積極的に引き受けていくつもりである。</p> <p>②各教員や学生の社会貢献について、ホームページなどで紹介する機会を増やしていきたい。</p>			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①実習関連の書類の公印について省略することを決め、実習助教の事務作業がかなり軽減された。</p> <p>②学科会議に関しては、事前に資料配布などを心がけたが徹底されず、会議時間の短縮にはさほど効果がなかった。</p> <p>③公務分掌については、一部委員の変更があったが、全体的には順調に進んでいた。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①会議時間の短縮については、事前の資料配布を徹底し、必要な事項の検討に時間をかけられるようにしていきたい。</p> <p>②人事について公平に検討しているが、若手の一部に異論があるようなので、透明性のある人事を行っていきたい。</p>			
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①入学直後のミスマッチによる退学や、2年生以上の生活の乱れからの留年などが見られる。個々の学生の状況把握が難しく、家庭でのかかわりも減少している学生について、教員が注視していく必要がある。</p> <p>②カリキュラム改編の影響はしばらく続くので、カリキュラムについて熟知している教員が教務委員をしばらく続ける必要がある。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①学生情報は授業担当者が比較的早期に気付く場合が多いので、担任との情報共有などをきちんと行っていきたい。例えば授業を連続して3回欠席した場合、科目担当から担任に連絡を入れるなどのシステムを作る必要がある。</p> <p>②委員は2年毎に変更してきたが、今後は状況に応じて同じ委員をしばらく続けてもらうことも考えたい。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	児童教育学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①学校現場での指導経験をもつ教員が半数近くを占めており、教職を目指す学生に対して学校現場で生かすことのできる実践的な指導をすることができている。</p> <p>②積極的にアクティブラーニングを取り入れた授業を実施しており、学生が主体的に学ぶことができている。</p> <p>③山手線ウォークラリー、年度末集会等の学科行事により、学生に豊かな人間性を育成することに役立っている。</p> <p>④例年、2年生が小学校体験実習として中野区の学校で実習を行っているが、全体として目白大学の学生は真面目で熱心であると評判が良い。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①素直で従順な学生が多いものの、自ら考え行動する資質能力の育成に課題がある。</p>			
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①学科会議の中で、学科独自のFDを実施し、積極的な研究交流に努めた。</p> <p>②学会等の発表数がのべ13であり、1人が年間1回のペースで発表しており、学科の教員が熱心に研究に取り組んでいることが分かる。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①学会等の発表数が多いものの、論文・書籍出版数が1人平均2未満である。研究業績を上げるように促していく必要がある。</p>			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①教員に対しての学生の数が少なく、学生に寄り添ったいい指導を実施している。</p> <p>1年生においては、年間2回の面談を実施し、学生の相談にのっている。</p> <p>②学科会議の中で必ず学生の情報交換を行っており、学科の教員の中で共通理解をしながら、足並みをそろえて学生指導をしている。</p> <p>③エコアクションの取組として、児童教育学科から3グループ参加している。1グループはその活動が認められ、BRITAマイボトルコンテストで入賞を果たし、目白学園のSDGs推進に貢献した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①昨年度の入試制度の変革の影響もあるが、入学者の定員割れを起こしており、次年度に向けての入試広報対策に力を入れていく。</p> <p>②ボランティアの経験に二極化が見られる。どの学生も積極的にボランティア活動に参加させたい。</p> <p>③今後教員採用試験の倍率が高くなることが予想され、一般企業向けのキャリア指導の充実が課題である。</p>			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①国及び地方公共団体等の委員を務めている数がのべ15であり、1人1つ以上の委員を務めている計算になる。</p> <p>また、国レベルでの社会貢献活動がのべ6件ある。これらのことから、学科の教員による社会への貢献度は大きいと言える。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①社会貢献活動に熱心に取り組んでいる教員もいるが、全くその実績がない教員もいる。</p> <p>どの教員も社会貢献活動に取り組むように推進していく。</p>			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①月2回の学科会議を実施し、学科の運営や学生指導について、意見交換をする時間を十分に取っている。</p> <p>②年度末に1年間の学科の取組について反省する機会を設定し、その反省点を次年度計画に生かすよう、PDCAに取り組んでいる。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①学科内の職務に関して一部の教員に負担をかけているように思われる。</p> <p>できる限り、仕事量を平均化できるように分掌等を工夫していく。</p>			
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①教員採用試験に向けて、全学科の教員が協同して、教員採用試験突破講座を実施している。</p> <p>その成果もあり、2019年度の教員採用試験の合格率は51%と高いものであった。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①団塊の世代の退職のピークが過ぎ、教員採用数が減少に転じる。その中でも高い合格率を維持することが学科としての大きな課題である。</p> <p>②地域連携に関する取り組みが少ない現状がある。中野区や新宿区との連携の可能性について探っていく。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価单位名称)	社会学部
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	学部長	
	氏名	飛田 満	

(1)特筆すべき事項

【教育・学生指導】

- ①主体的な学び、専門的知識の習得、社会人基礎力の向上をめざして、アクティブラーニング、インターンシップ、社会連携・貢献活動と連動させた社会学部「ならでは」の教育は、2019年度も学部全体として、また学科・ゼミ単位においても、フィールド調査、イベント参加、プロジェクト実施等、様々なアプローチで積極的に取り組んだ。
- ②アクティブラーニングの取組支援の一環として、社会学部「アッハ！体験」プロジェクトの募集を行い、3学科81名の学生による11件の応募があった。企画内容の質的向上の観点から厳正な審査を行い、8件のプロジェクトを採択した。1月に成果発表会を開催し、プロジェクトを完遂した7件の成果発表と質疑応答が行われた。
- ③学生たちの主体的・社会的な学びの成果として「ACAP理事長賞」「ACジャパン広告学生賞」「ピンクリボンデザイン賞」等の受賞・入選、また恒例の「遺跡フェスタ」や「染の小道」の企画・協力のほか、他学部・他学科・他ゼミとも連携しながら、「目白エリアの賑わい創出事業」「東京2020大会250日前イベント」「こどもシェフ食堂」「見沼田んぼ桜回廊ドローン動画」「新宿区若者のつどい2019」「神楽坂ブチ文化祭」「SDGsアクションフォーラム」等の地域連携・プロジェクトが実施され、大学ホームページや目白大学新聞、オープンキャンパス等を通じて情報発信された。
- ④社会情報学科では企業等から実務家を招いて実践的マーケティング戦略を学ぶ授業を展開、メディア表現学科ではメディア学部の社会連携プロジェクト教育を活用、地域社会学科ではフィールドワークによる現場教育を実践するなど、各学科ともにユニークな教育方針のもと学生の興味や関心を引き出す授業が実践された。
- ⑤スタートアップセミナー（千葉県成田市）においてリーダー学生が中心となって学部・学科プログラムを実施し、学部・学科への帰属意識を高め、学生間の親睦を深める点で有意義であった。
- ⑥初年次教育としてのフレッシュマンセミナー・ベーシックセミナーを各学科の特徴を活かす形で開講し、大学生としての自覚を促した。
- ⑦学芸員、教員、社会調査士、環境マネジメント実務士、観光ビジネス実務士、販売士、情報上級処理士、国内旅行業務取扱管理者試験、歴史能力検定、日本語検定、MOS等、様々な免許・資格取得、試験・検定受験のための支援を行った。
- ⑧各学科とも学科独自のキャリアデザインの授業を組み立てるとともに、ゼミの時間等に就活に関する情報を学生に提供して支援を強化した。また学科会議で就活・内定状況等に関する情報共有を細かく行った。
- ⑨3学科平均の就職内定率は93.3%で、前年度に比べると1ポイントマイナスであったが、就職希望者のほぼすべてが就職先を得た。
- ⑩インターンシップについても学生への積極的な声かけをし、学生の参加も積極的であり例年以上に参加人数が増加した。
- ⑪障がい等の学生に関しては、学科長を中心に学生課の担当職員と学科の担当教員及びクラス担任が密にコミュニケーションを取り、できる限りの支援を行った。

【研究・社会貢献】

- ①論文・出版物・学会発表等の件数は、学部全体で均すと教員一人当たり2件程度に相当し、科研費、特別研究費等獲得に意欲的な教員、海外で学会発表を行う教員もいて、学生指導や学内業務に多くの時間が割かれる中、決して十分とは言えないが積極的に研究活動に取り組んでいる。
- ②10月に株式会社シグマ代表取締役社長の山木和人氏を講師に迎え、社会学部講演会『SIGMAが大切にしていること』を開催した。1月には新宿区生涯学習スポーツ課課長の宮端啓介氏、株式会社ザ・ファースト代表取締役の山本芳裕氏、新宿区スポーツ推進員の多部田里志氏を講師に迎え、第12回地域フォーラム『スポーツで社会は変わるのか』を開催した。
- ③戸田市政策研究所との包括連携事業、株式会社有楽製菓、株式会社九電工等との産学連携事業、宮城県気仙沼市、福島県矢野町、群馬県上野村等との地域連携事業を実施した。さらに新宿区、落合・中井、神楽坂、横浜市、綾瀬市等の企業や法人、自治体や市民等との多種多様な連携事業を展開した。また多くの学会・協会の役員や、自治体、市民団体、財団等の委員を担う教員が多数おり、指導的な立場での社会貢献がなされた。

【管理運営】

- ①2021年度スタートをめざし、学部共通科目、社会情報学科及び地域社会学科のカリキュラムの改訂準備作業を行った。社会学部では、学部共通科目の位置づけを見直し、メディア表現学科の廃止に伴い、開設科目の軽微な改訂を行った。社会情報学科では、基幹科目とコア方法論の強化、系列（ユニット）の統合と再編、系列横断科目の設置と発展科目群の新設、及びAI・データサイエンス領域の取り込みを改訂の骨子とした。地域社会学科では、コース制を導入し、地域・ひとつづくりコースと観光・まちづくりコースのもとに、一部科目の廃止・新設を含む、基幹科目、形成科目、展開科目の再編を改訂の骨子とした。
- ②毎月、社会学部教授会の前に社会学部運営委員会を開催し、学科間の情報共有と、学部内のガバナンスについて意見交換を行い、円滑な学部運営と、教授会と学部長等会議や各種委員会等との調整に努めた。
- ③前年度社会学部第4次中期計画を策定したことを受けて、2019年度より社会学部中期計画実施のためのワーキンググループの体制を若干見直し、「教育・授業改善」「教育・学生支援」「研究・社会貢献」の3つのWGと懇談会担当を学部内に配置した。
- ④社会情報学科で1名、情報教育を担う新任教員を採用した。また3学科で非常勤講師の補充人事が行われた。
- ⑤7月にメディア学部と合同で、社会学部教員懇談会を開催し、非常勤講師と専任教員との交流・意見交換の場、及び社会学部とメディア学部の教員同士の情報交換・共有の場として、非常に有意義な機会となった。
- ⑥2020年度入試は社会学部全体において基本的に好調であった。とくに地域社会学科は志願者増に伴い、総合型選抜と学校推薦型選抜で定員に近い入学者を確保した。ただし結果として入学者数は社会情報学科119名、地域社会学科85名となり、昨今の入試状況における定員管理と合否判定の難しさを再認識した。

(2)今後の課題

- ①2019年度よりスタートした新たな学部3方針とそれに基づく第4次中期計画の着実な実施に、教育・研究・管理運営の各方面で組織的・効率的に取り組んでいく。
- ②教育面では、アクティブラーニング、インターンシップ、社会連携・貢献活動と連動させた本学部「ならでは」の教育に、引き続き積極的に取り組んでいく。
- ③学生支援の面では、初年次教育、資格取得、キャリア教育、障がい学生の学修支援等、様々な分野での学生サポートに取り組んでいく。
- ④研究面では、学生指導や学内業務に時間を割かれながらも、更なる論文作成や学会発表、外部研究費・特別研究費等の獲得などが要請されている。
- ⑤社会貢献の面では、すでに多くの実績を残しているが、更に学科を越え専門を越えた共同研究や研究交流ができないか検討の余地がある。
- ⑥管理運営面では、学科間の連携強化、効果的な情報発信、レジリエントな学生募集など課題が多い。
- ⑦メディア表現学科では、最速で行けば来年、いかにスムーズに全員無事卒業させていくかが課題である。
- ⑧2021年度よりスタートする社会情報学科と地域社会学科の新コンセプトとカリキュラムの効果的な広報と旧カリキュラムからの段階的移行準備に取り組んでいく。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	社会情報学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①2021年度から施行される新カリキュラムが完成した。</p> <p>②卒業研究の質的向上を図るべく、副査制度を取り入れて3年目になるが、合否判定等が厳格化され、適切な指導ができた。</p> <p>③実学を実務者（企業人）から学ぶ機会としての「現代の社会1（ファッションブランド戦略論）」「フードブランド戦略論」では、今年度も企業等の講師を招き、実践的マーケティングを学ぶ機会を展開した。</p> <p>④フォローアップセミナーを開催した。自宅学習として英語のワークシート、読書感想文、社説の要約を課した。新型コロナウイルス感染拡大禍において、大学でのセミナーは実施することができなかったが、提出された課題に先生方がコメントしたものと、当日実施予定であった模擬授業の資料を送付した。資料に関しては、それを見て学んだ後、自分の考えをまとめたレポートを提出させた。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①2021年度から施行する新カリキュラムにスムーズに移行することができるよう準備を進める。</p>			
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①教員による著書10件、論文4件（内国外2件）、学会での発表7件（内国外2件）があった。</p> <p>②学科の研究及び教育書籍『ソシオ情報シリーズ第19号 社会情報の現場から』を刊行した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①教員にとっての十分な研究活動（学会発表・著書及び論文執筆等）の実現を目指したい。</p> <p>②対外的研究資金の更なる獲得を目指し、研究活動の充実を図りたい。</p> <p>③海外の学会活動等で精力的に研究に励む教員もいるが、全体的に教育活動・学生指導に時間が割かれる現状がある。効率的な学科運営を図り、教員の研究活動に従事する時間の確保を目指したい。</p>			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①成績・出席不良学生には、学期末ごとにクラス・ゼミ担任のコメント付き成績表を保護者宛に送付した。</p> <p>②3年次生は秋学期後半より、4年次生は1年間を通じて社情就活相談会を週1回実施し、「求人リスト」等資料も週1回発行した。</p> <p>③2年次生は春学期途中でクラス担任の面談を実施し、個別指導が手薄となる2年次学生の指導強化と不安等の解消に努めた。</p> <p>④「アッハ！体験」プロジェクトに3件が採択され、学生の主体的な学びを支援することができた。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①1年次生はベーシックセミナー時・2年次生は担任が個別面談を実施したが、さらに可能な限り個別面談等の機会を作り、学生の把握と指導を徹底したい。これら中途退学者の削減に結び付ける策の一つとして重視する。</p> <p>②最終の就職内定率は95.1%であり、昨年度に比べると3.7ポイント増であった。新型コロナウイルス感染拡大禍で先が見えない状況ではあるが、来年度も例年通りキャリアセンター活用を学生に勧めたり、保護者向け就活相談会ではゼミ担当者が保護者面談を行うことに加え、個々の学生の就活状況を教員間で情報共有し、学生への指導を強化したい。</p>			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①企業（九電工、有楽製菓）と産学連携でプロジェクトを実施したゼミや、消費者関連の協会と連携して事業を行った教員がいた。</p> <p>②気仙沼市を中心に東日本大震災復興へのボランティア活動、新宿区の目白銀座商店会との連携事業、綾瀬市で行われている子ども支援の事業への参画、群馬県上野村の「かじかの里学園」との連携事業、矢祭町の町役場との連携事業等学生とともに活発に社会貢献事業に携わる教員が多数見受けられた。</p> <p>③学会役員、公的な団体の専門委員、講演会講師等社会貢献事業に携わる教員が多数見受けられた。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①ソーシャルデザインユニット等の学びに直結したボランティア活動への参画等、学生を巻き込んだ社会貢献の場をさらに増やしていきたい。</p> <p>②社会に提言していく場として、社会学部他学科との連携の下に社会貢献活動の発展を継続検討したい。</p>			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①新カリキュラムの完成を目指し、ワーキンググループを中心に計画通りに進めることができた。</p> <p>②学科内の共通課題認識、課題提起を得るために、『ソシオ情報シリーズ』刊行を継続できた。</p> <p>③学科FDを2回実施した。テーマは「学生の主体性を育むための方策」及び「本学科におけるAI・データサイエンス教育」であり、それぞれ活発な意見が交わされた。</p> <p>④新任者1名の採用活動は計画通り遂行され、情報教育を担う有望な教員を採用するに至った。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①若手教員が増える中、より透明性が高く全構成員が課題を共有し共働できる体制を促進・継続したい。</p> <p>②教授会等、学部中心の大学運営に連動した学科の組織運営を心がけ、学部・全学の活動にも寄与することを継続する。</p>			
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①若手教員が増えたことにより学生の士気も上がり、また学生を巻き込んだ社会貢献活動も活発化した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①今年度入試においては入学手続者が119名であり、定員割れであった。新型コロナウイルス感染拡大禍で先が見えない状態ではあるが、次年度は定員確保を目指して、入試広報部とも連携をとりながら、学科広報に全力を注ぎたい。</p> <p>②2021年度から新カリキュラムを施行するにあたり、教員全員が学科のAP、CP、DPを再確認し、これからの学科の在り方を考えながら準備を進める。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	メディア表現学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入		
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①石川透ゼミでゼミ活動として取り組んでいた「ACジャパン広告学生賞」のTVCM部門において、3年生5名が奨励賞を受賞した。 ②平山秀昭ゼミの3年生5名が新宿区のイベント「こどものまちをつくろう」において指導スタッフを務めた。 ③西尾典洋ゼミの3, 4年生がさいたま市との協同プロジェクトで「見沼田んぼの桜回廊のドローン動画」を制作、ウェブ公開された。 ④3年生9名が、岐阜県の飛騨市観光協会で「聖地巡礼インターン」を行った。 ⑤石川透ゼミの学生1名が、「第15回ピンクリボンデザイン大賞」のコピー部門で、ファイナリストに選ばれた。 ⑥三上義一ゼミの学生が編集に関わった『目白大学新聞』第47号が発刊された。 ⑦平山秀昭ゼミ、馬場一幸ゼミ、安齋徹ゼミの3年生が新宿区が主催する「新宿区若者のつどい2019」の運営に参加した。 ⑧リアクションペーパーの活用、講義とグループワークの相互活用、少人数教育、インタラクティブな対話形式授業の実施、アクティブ・ラーニングメソッドの活用、グループ・ディスカッションやディベートの活用、面談のきめ細かな実施などを行った。 <p>(2)今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ①2018年度にメディア学部メディア学科に改組されたため、今後はどのように過年次学生の学習意欲を高め指導していくかが課題である。 		
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①新学部の移行期に当たり、所属教員数が専任教員1名のみであるため、学科として業績数が少ない結果となっている。 <p>(2)今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ②所属教員の研究意欲を高め、支援する。 		
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①ゼミごとのきめ細かい就職活動サポート ②きめ細かな面談の実施 ③プロジェクトへの参加奨励 ④インターンシップへの参加奨励 ⑤出席低迷学生に対するきめ細かな対応、保護者との面談や連携 <p>(2)今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ①学生の学生生活の意義と目標設定の重要性についての認識を高める。 ②過年次生の指導を徹底し、卒業までサポートを行う。 		
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①新学部への移行期で所属教員は専任教員1名のみであるため、特筆すべき事項は無し。 <p>(2)今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ①少ない教員数でも研究成果を社会貢献に生かすための取り組みが必要である。 		
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①現在は新学部への過渡期であるため、メディア学部メディア学科と協力して行っている。 <p>(2)今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ①現在は新学部への過渡期であるため、新学部と協力してさまざまな組織マネジメントに取り組む必要がある。 		
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①すべての教員がそれぞれの立場からクラス・ゼミ以外にも学生指導をきめ細かく行っている。 ②学科内でインターンシップを奨励し、卒業生による受け入れや毎年継続してかわりを持つ受け入れ先も増えている。 ③新学部の社会連携プロジェクト教育をメディア表現学科の学生にも応用し、ゼミごと、学科単位で社会連携に取り組ませている。 <p>(2)今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ①新学科にすべて移行し、学科を閉鎖するまで、過年次生に対する指導を心がけ、卒業に向けてサポートしていく必要がある。 		

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	地域社会学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①2006年度設置の地域社会学科のコース制導入の検討開始。</p> <p>②2021年度より「地域・ひとづくり」コース、「観光・まちづくり」コースの2つに分けるカリキュラムおよび学則改定の準備を行った。</p> <p>③教員の授業方法として講義一辺倒からアクティブラーニングや思考型・対話型の授業の取り組みが多く見られた。</p> <p>④知識や概念理解・定着のため小テストや受講シートなど創意工夫を凝らした把握に努力している。</p> <p>⑤教職、学芸員、社会調査士、環境マネジメント実務士、観光ビジネス実務士など多くの学生が取得した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①正式な学則改定。</p> <p>②2021年度のコース制開始に向けた広報活動など受入体制の強化。</p> <p>③コース制に向けた教育のあり方の検討。</p> <p>④学生の成績や授業理解の向上のための客観的なデータに基づく分析の推進。</p>			
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①科研費取得者の順調な成果報告書の提出。さらなる課題の実施が進められた。</p> <p>②台湾台北での学生を引率した海外でのフィールドワークが実施された。</p> <p>③東日本大震災から9年経過したことで、神戸、広島、長崎、東北での記憶と記録、伝承に関する市民活動の調査が実施された。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①新型コロナウイルスに対応したフィールドワーク実施の方法を検討する。</p> <p>②新型コロナウイルスの影響を考えた学生引率を伴う調査研究の計画実施の方法を検討する。</p> <p>③授業や学事業務による研究時間の減少を解消し、研究成果のアウトプットの促進。</p>			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①オープン参加のフィールドワークの実施が学生に好感を得る。</p> <p>②聴覚障害、心疾患など支援を要する学生への対応。</p> <p>③留年生の卒業論文および取りこぼし単位取得への指導強化。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①フィールドワークの多様なあり方を検討し、安全な実施ができる方法を策定する。</p> <p>②学生課との連携を密にし、保護者を含む学生と教員との信頼関係構築と支援体制の組織的な強化。</p> <p>③留年生や欠席などの多い学生へのきめ細かな声がけによるつながりの強化。</p>			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①新しい教員が入ったことによる新たな連携事業や組織団体とのつながりの拡充が見られた。</p> <p>②教員個々の活動、学科組織としての活動があるなかで、教員個人の活動が特筆される。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①教員の活動自体を大学としてどう発信できるか、PR材料として発信力強化が必要。</p> <p>②組織的な連携や貢献は事業やその数が増えるとマンパワーの不足が見られる。学生を巻き込む動員力と組織力を高める仕掛けの創出が必要。</p>			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①教員の体調不良に伴う授業への影響が学生からも指摘された。</p> <p>②特定教員のゼミ指導に対する不満が多く聞かれた。</p> <p>③フィールドワークを看板にしているが、現場体験やフィールドワークを経験していない学生からの不満の声があった。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①健康管理は個々の問題であるが、休講や振替措置など正規のルールで変更するなど徹底する。</p> <p>②学生の授業および教員に対する不満や意見は、大学のハラスメント相談員など制度的な窓口で対応するよう指導する。</p>			
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①大学の事務や委員会等の業務の均等化を目指したいが、特定の人員に仕事が集中している。</p> <p>②授業コマ数が半期10コマ前後を持つ体制は、教育の質の低下を招き、学生の学修水準が維持できない可能性がある。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①コース制の導入を機に、授業数および受け持ちのコマ数の平準化を検討する。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価単位名称)	メディア学部
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	学部長	
	氏名	三上 義一	

(1)特筆すべき事項

- ①安斎教授が退任したこと（令和元年度3月末日）。
- ②その後任を公募し、一人を教授候補として選出し、文部科学省教員審査に提出した。
- ③令和元年12月ごろから発生し始めた新型コロナウイルスのため、授業実施方法を見直すことを迫られた。
- ④大学が主催した「とんがり」プロジェクトに応募し、広報費として400万円を獲得。
- ⑤その資金でメディア学部を宣伝する映像を制作、山手線のトレインチャンネルやYouTubeで放映した（令和元年度3月実施）。

(2)今後の課題

- ①安斎教授の後任の選出。
- ②新型コロナウイルスに対応するために、今後の授業をリモートで実施する方法の模索。
- ③また、一部のみを対面で実施するなど、コロナに対応しながら授業を進めていく予定。
- ④今後とも引き続き積極的に広報活動を実施予定。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	メディア学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項 ①現在、AC期間中であり、文部科学省の監督下にある。そのため4年間はカリキュラムなどを変えることができない。</p> <p>(2)今後の課題 ①AC終了後のカリキュラムの変更に着手すること。</p>			
研究	<p>(1)特筆すべき事項 ①学外・学内特別研究費に応募、中には科研費を獲得した教員もいる。</p> <p>(2)今後の課題 ①公務が非常に多く、なかなか研究に注力できないのが現状だが、それでも学外・学内特別研究費に応募していきたい。 ②できるだけ科研費にも応募し、その取得に努力したい。</p>			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項 ①メディア学科になってから、学生の質が若干上がってきている。そのため教育の質も向上していると思う。</p> <p>(2)今後の課題 ①メディア学科の卒業生を輩出し、世間にその存在を知らしめたい。 ②さらに質の高い学生の入学を望みたい。 ③偏差値は55～60をまずは狙いたい。</p>			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項 ①令和元年度末になると、新型コロナウイルスが流行し始め、社会貢献事業・プロジェクトの実施が非常に難しくなった。 ②コロナにかかわらず、ZOOMなどを利用してリモートで活動を継続しているゼミ（クラス）もある。</p> <p>(2)今後の課題 ①コロナが落ち着き始めれば、社会貢献事業を再開したいと思う。</p>			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項 ①安齋教授が退任したこと（令和元年度3月）。 ②その後任を公募し、一人を教授候補として選出し、文部科学省教員審査に提出した。</p> <p>(2)今後の課題 ①安齋教授の後任の選出。 ②その後任を早く選出し、教員審査の「可」を得て、ACの最終年度に臨みたい。</p>			
その他	<p>(1)特筆すべき事項 特になし。</p> <p>(2)今後の課題 特になし。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価单位名称)	経営学部
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	学部長	
	氏名	土井 正	

(1)特筆すべき事項

- ①2019年度改訂カリキュラムスタート
新カリキュラムにおいて、配当年次の変更（前倒し）や開講学期の変更が生じたため、2年生以上の学生が戸惑わないよう、時間割面では例年以上に配慮するとともに、オリエンテーションやゼミ教員等の指導を通じて学生に説明を十分に行うようにした。結果として、カリキュラム移行による混乱はなかった。また、新旧カリキュラムにおける必要な授業科目のすべてを休講することなく開講できた。
- ②日商簿記2級講座（大原簿記学校委託）の開講スパン変更
これまで、9月学習開始で、翌年2月の検定試験の合格をめざすカリキュラムだったものを、10月後半開始で、翌年6月試験合格をめざす形態に後ろ倒し及び学習期間の延長を実施した。これにより、学生にとっては、2級講座開始前に、講座受講の前提となる3級合格レベルに達するまでの時間的余裕ができ、かつ、2級の勉強時間もより多く確保することが可能となった。受験サイクルの変更により、本年度単年度でみると一時的に2級合格者が減少することが考えられるが、来年度以降は従前より合格者の増加が期待される。
- ③入学定員未充足について
2020年度4月入学者は定員（130名）を下回る129名であった。受験生は増加しているものの、辞退者が増加したことで結果的に定員を充足できなかった。近年は、とくに3月25日を過ぎてからの入学辞退者が増加しており、用意した補欠では足りないばかりか、10～15名程度の剰余合格者では足りないという事態になっている。
- ④教員人事について
2019年度末に2名の退職（うち定年退職1名）があり、翌年度4月採用として3名の受け入れができた。専任講師1名の2020年度准教授昇任も承認された。

(2)今後の課題

- ①2019年改訂カリキュラムについて
新カリキュラムがスタートしたが、早くも種々の課題が浮かび上がってきた。まずは、AP・DP・CPと具体的な科目配置（配当年次や必修選択区分を含む）の整合性の問題である。また科目間の連携や履修順序といった細かい点についても問題が生じている。なにより、学部の人事構想との齟齬も表面化しており、担当分野の分担や担当科目数におけるアンバランスが放置されたままとなっている。
こういった事態は、カリキュラム改訂の過程において、学科教員一人ひとりの、自分たちが置かれている教育環境ならびに教育課題に対する認識不足が根底にあり、さらに、教員間で「育てて送り出す」学生像（イメージ）についてのコンセンサスが不十分であったことなどが原因で生じたと考えられる。
この問題の解決のため、学部に将来構想委員会を設置した。今後は、次回のカリキュラム改訂に向けて、同委員会主導で、学科の全教員がコミットメントしやすい体制を確立し、議論を続けていく必要がある。
- ②入学定員充足について
2020年4月入学者も定員を充足できなかった。新学部設立に伴う入学定員キャップ時を除くと、これで2年連続定員を充足できなかったことになる。定員辞退率（いわゆる歩留まり）を正確に予測することは不可能に近いが、辞退者の多くが3月下旬に集中していることを考慮すると、補欠等の確保方法については十分に吟味検討しなければならない。
そして、より効果的なのは、辞退されることを甘んじてよしとするのではなく、辞退されないようにする、具体的には、同一のレベル、同様のカテゴリーのあまたある大学の中で「選ばれる大学」「選ばれる経営学部」になることである。
すなわち、競争優位性の確立が喫緊の課題であると考えられる。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	経営学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①2019年改訂カリキュラムがスタートした。</p> <p>②日商簿記2級講座（大原簿記学校委託）について、より多くの合格者を出すため、合格目標を2019年2月試験から2020年6月試験に変更した。</p> <p>③ITパスポート試験をはじめ、リアルマーケティング（販売士）検定やビジネス法務検定において一定の成果を上げることができた。</p> <p>④教室設備を含む情報教育環境の改善を企図したが、実現しなかった。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①学士力を担保するための教育基盤として、主に初年次教育の科目間における連携を図り、内容にまで踏み込んで学習目標を設定する。</p> <p>②体系的なキャリア教育の実施に向けキャリア関連科目を拡充するとともに、就職活動支援体制の拡充を図る。</p> <p>③改訂カリキュラムについて、AP・CP・DP等との齟齬や配当年次、科目間の連携面での課題が浮かび上がってきた。早期に是正するための検討を開始する必要がある。</p>			
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①研究活動に関する支援策として、時間割配置（作成）の際に、研究時間確保に配慮した。</p> <p>②科研費および特別研究費は、応募数自体が少なかった。</p> <p>③全体として、論文発表、書籍刊行および学会発表等の業績は着実に増加を重ねている。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①科研費や特別研究費、その他外部研究資金の獲得を推進・支援する。</p> <p>②他大学あるいは他の研究機関、企業との連携を継続発展させる。</p> <p>③研究業績や獲得研究資金をデータとして整理する。</p> <p>④研究に関するFDを実施する。</p>			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①退学・除籍となる学生の数は、引き続き減少している（29年度：30名、30年度：29名、31年度：22名、本年度：15名）。</p> <p>②不本意入学から学習目標を見いだせず、不登校につながる学生が若干名見られた。</p> <p>③試験における不正行為が数件あった。数は多くないものの毎年発生する。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①入学前から、卒業後まで、キャリア形成をフローとして深く考えさせ、勉強意欲を高める。</p> <p>②不本意入学の学生も増加しているので、指導に配慮が必要である。</p> <p>③ゼミ担当やクラス担の役割として、学生の話をよく聞き、学生の総合的な満足度を高める。</p>			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①教員個々の専門分野を活かした様々な社会貢献の実績があった。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①学科全体が「チーム」として地域との連携を模索し、学生募集につながる形を検討する。</p> <p>②研究面と同様に、他大学あるいは他の研究機関、企業との連携を継続発展させる。</p>			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①退職者は2名。経済学分野教授（定年）および会計分野専任講師（自己都合）である。</p> <p>②専任講師（有期）3名を採用した。内訳は、会計分野2名、マーケティング分野1名。</p> <p>③欠員のマーケティング分野教授は公募したが採用できなかった。</p> <p>④教員人事やカリキュラム等を幅広く検討するため、経営学部将来構想委員会を設置した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①教育内容を充実させるために、教員の補充・増員が急務である。</p> <p>②委員会委員選出・配置の見直しを図る。</p> <p>③中期計画を確実に実行するため、学科に各種ワーキンググループを組織する。</p> <p>④採用・昇進・無期転換の基準を再検討し、明確な基準を公表する。</p>			
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①合格後の入学辞退者は46名。昨年の22名から倍増した。</p> <p>②3月末に多くの辞退者があり、定員割れとなった。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①入学定員の確保。辞退者数の見込みは難しい。</p> <p>②入試形態と学部教育、進路との関係を、具体的に把握する。</p> <p>③広報活動として、WebサイトやSNSを活用を検討する。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価单位名称)	外国語学部
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	学部長	
	氏名	小林 寛	

(1)特筆すべき事項

【教育】

外国語学部では、学部及び各学科と大学総合教育機構と緊密に連携し、総合科目および学部共通科目につき学部教育課程委員会及び各学科により具体的に教育内容を検討した。専門教育につき、各学科とも、専門科目の基礎・応用言語教育では習熟度別クラス編成を基に、言語運用能力の向上を強化した。専門科目の柱をなす各分野各科目の授業内容を充実し内容深化を図り、3・4年次生の専門・特別セミナー(ゼミ)で4年間の学修の集大成たる卒業研究を充実した。留学関連科目・制度は、学部留学推進策検討委員会で各科目との連携につき検討した。各種行事が教育に活かされている。

(1) 英米語学科では、

- ① 教員の各種研究活動を、学生への教育活動・学生の学習活動に連携させ活かすことに尽力した。
- ② 各学科の留学教育の拡充と安全とにつき検討を重ねた。

(2) 中国語学科では、

- ① 交換留学派遣先に新たに華東師範大学・華東理工大学・東呉大学と提携し、学生を派遣した。
- ② 日本航空主催「JAL訪日研修団」で来校した台湾の大学生らと学科学生との交流活動を実施した(2019年7月4日)。
- ③ 外部講師を招聘し「台湾語講座」を開催した(2019年11月4日)。
- ④ 立正大学経済学部田中ゼミと選択必修科目「中国の歴史」受講生による合同研究発表会を実施した(2019年12月21日)。
- ⑤ 学科学生が2019年度JAL中国語スピーチコンテストに参加した(2019年12月7日)。

(3) 韓国語学科では、

- ① 外国語村の「韓国語村」を年間20回実施し、目白大学学生と韓国からの交換留学生の有効な言語・文化の交流学習の場を設営した。「韓国語学科体育祭」を実施し、学年を超えた学生全体の融和を進めた。「韓国語学科映画祭」を実施し、社会(映画監督招待)と連携した韓国語教育を推進した。「SINNARA」活動により、学科学生と交換留学による留学生との融和を図り活性化させ殆どの学科学生が「桐和祭」に参加した。
- ② 留学教育の充実を図り、夏冬の2回、教員による留学先協定校視察を実施した。協定校訪問により交換留学、D. D. 制度、J. D. 制度を検討した。韓国語学科後援会と連携し、春秋の2回、「保護者説明会」を実施した。「韓国語学科歓迎会」「韓国語学科留学歓迎会」を実施した。留学関連情報を学生に正確・迅速に周知する「留学手帳」アプリを始動した。
- ③ 卒業研究の充実を図り「卒業研究中間発表会」を学科全体で、「卒業研究発表会」を全ゼミが各ゼミごとに実施した。
- ④ 学園主催の学科広報プロジェクト企画である「とんがりプロジェクト」にエントリーし採択され、支援金により学科広報用のYouTube動画を作成、学科オリジナルサイト、山手線の窓上広告により、広報した。

(4) 日本語・日本語教育学科では、

- ① 日本語教育実習開講に向け、国内及び海外の協定校との連携・協力体制を整え、体系的な教育システムを構成しつつある。学科海外協定校は台湾(東呉大学・世新大学)、韓国(高麗大学校)、オーストラリア(サマビルハウス)、国内日本語学校3校を数える。
- ② 新カリキュラムを具体的に計画実施・運営しつつ点検・調整した。
- ③ 日本語教育センターの改編に際し学科新体制の人事を進め、教育実習科目を調整し充実した。センター改編に伴う「日本語教育支援室」の確保や図書、備品の補充をし、日本語教育全体の質の担保と充実を図った。

【研究】

学部では学部FD委員会、学部広報委員会と連携しつつ、研究活動を充実させ広報する取組みを進めた。各学科ともに構成員は研究活動を拡充させた。

(1) 英米語学科では、

- ① 英語教育・言語文化関連図書の出版2件、② 海外の査読付き学術誌での論文発表2件、③ 国内の査読付き学術誌での論文発表2件、④ 博士論文を提出1件(1名、博士(文学)早稲田大学)⑤ 国際学会のproceedingsでの論文発表1件、⑥ 国際学会での研究発表5件、⑦ 国内学会での研究発表2件、⑧ 国内学会での招待講演1件、⑨ 国内外の学術誌での投稿論文査読、国内1件、海外3件、⑩ 科学研究費による研究補助6件(1件は代表者転出)があった。

(2) 中国語学科では、

- ① 学科教員の研究論文掲載数2件、② 書籍出版数3件、③ 研究発表数は4件、④ 学科教員2名の科学研究費(若手B・基盤C)の最終年度を迎え、当該研究に関する学会発表等、積極的に展開された。

(3) 韓国語学科では、

- ① 学科教員の書籍出版、研究論文掲載数4件、② 学会等の研究発表数3件、③ 学科各教員のテキスト、副教材開発は全員8件を数える。

(4) 日本語・日本語教育学科では、

- ① 競争的獲得資金(代表)の科学研究費助成に継続4件が採択(基盤C「東南アジアにおける「学び合う教師コミュニティ型教師研修」の広がり」と継続性の構築)、基盤C「海外の日本語学習者と日本語教師のピープに関する調査票の新たな開発とその検証」、若手研究「日本語学習者のための漢字学習方法・意識の調査票の開発と多言語化」、若手研究「第二言語としての日本語のリズム習得を目的としたHVPTに関する基礎研究」)。② 学術誌4件(単3,共1)、論文集2件(単2)、目白大学紀要1件(単1)、他大学紀要1件(共1)が刊行された。③ 海外における基調講演2件(ベトナム、インドネシア)、国内における講演1件、国際大会で研究発表全2件(カナダ)、国内の学会発表全7件、海外提携大学との共催による日本語教師研修の実施2件などが行われた。

【学生指導】

学部の各学科とも諸企画と連動させつつ日常的な学生活動を充実させた。これを学部広報に繋げようとした。

(1) 英米語学科では、

- ① 卒業後の進路指導に意を用い、就職内定率が90%を超え、学内でも上位となった。
- ② 学科学生2名が全国学生英語プレゼンテーションコンテストで入賞した。

(2) 中国語学科では、

- ① 交換留学後の学生による「留学報告会」を開催した(2019年7月18日)。
- ② 交換留学生と学科学生との交流活動の一環として「国際交流バスツアー」を企画し、山梨県内を参観した(2019年10月26日)。
- ③ 外国語学部「外国語村」の活動の一環として、外部講師を招聘し「京劇体験講座」を開催した(2020年1月30日)。
- ④ 卒業生の就職内定率は90%以上と好調であった。

(3) 韓国語学科では、

- ① 韓国語基礎科目の能力別クラスの教育のクラス間の連携の充実を図った。
- ② 「フレッシュマン・セミナー、パーシク・セミナー」「韓国事情」の教育内容を充実した。
- ③ 留学教育の充実を図った。
- ④ 卒業研究活動の充実を期した。
- ⑤ SA、TAの専門科目教育における学生指導との連携を模索した。
- ⑥ 「韓国語村」を立上げ学習意欲を高めた。SINNARAの活動を支えた。

(4) 日本語・日本語教育学科では、

- ① 「グローバルナレッジシリーズ」を継続的に実施し、学生が様々な体験や広い視点を獲得する場を設定した。
- ② 前年度に続き、しょうがいのある学生につき、専門家や学生課、学科教員と連携しつつ対応した。教員FD研修において専門家を招き、其々の事例をもとに検討が加えられ、教員間で共通認識を得た。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価单位名称)	外国語学部
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	学部長	
	氏名	小林 寛	

【社会貢献】

- 学部の各学科教員は学外の各種団体との連携を展開した。
- 英米語学科では、①学会役員1件、②地域連携2件、③産学連携4件、④その他社会貢献4件を数える。
 - 中国語学科では、
 - ①学科教員が、学校法人角川ドワンゴ学園N高等学校（通信制高校(広域)・単位制)で中国語事業全般（ネット授業の企画および実施、通学生向けのカリキュラムや教材の構築など）のコーディネーターを務めた。
 - ②学科教員が、テレビ朝日の番組「タモリ倶楽部」に出演し、中国の漢字について解説した(2019年9月20日)。
 - ③学科教員が、公益財団法人松下幸之助記念志財団主催の「松下幸之助国際スカラシップフォーラム」(2020年1月12日・於・東京大学) 実行委員としてフォーラム登壇者の選考、登壇者向けプレゼンテーション講座開催などに携わり、若手研究者の育成支援をした。
 - ④学科教員が、本学の地域連携・研究推進センターの活動の一環として、高齢者福祉施設「神楽坂」での中国語講座を開催し、市民講座「きのえね会」で講演した。
 - 韓国語学科では、
 - ①韓国財団と連携し「韓国語学科映画祭」を実施した。
 - ②「桐和祭」で韓国文化展示や韓国料理販売をし、近隣地域の活動と連携しつつ、韓国語韓国文化に興味を持つ人々への韓国文化紹介をした。
 - 日本語・日本語教育学科では、
 - ①教員がベトナム、インドネシアの学会や大学に招聘され、日本語教育に関して基調講演した。
 - ②日本語教育センター教員が落合第三小学校との交流活動で、本学留学生を引率し、日本文化、遊び、給食を共に食べる活動に参加した。
 - ③教員が港区(東京プリンスパークタワー)で行われた「令和に関する講演会」で、一般の来客者むけに講演した。
 - ④当該学科の学生が「特定日営利活動法人みんなのおうち」が主催する外国にルーツを持つ子ども(新宿区)の日本語、教科学習、母語支援活動に参加した。

【組織マネジメント】

- 学部では、毎月、学部運営委員会を有し組織的諸活動の意思疎通を図った。
- 英米語学科では、多岐に渡る学科業務分掌につき公平性が重視され、運営された。
 - 中国語学科では、
 - ①学科業務全般において教員間の連携が緊密で、教育活動に関する諸情報を迅速かつ正確に共有できる体制を維持した。
 - ②入試では、昨年度に引続き受験者数が安定的な増加傾向にある。
 - ③学科FDを実施し、学科のカリキュラム改編などの課題について建設的な討論を進めた。
 - ④学科の広報活動では、高校への出張授業や学科公式Facebookによる情報発信などを積極的に展開した。
 - 韓国語学科では、教員間の連携が強化された。
 - 日本語・日本語教育学科では、日本語教育センターの業務の整理・統合を進めながら組織・マネジメントの検討を進めた。

【その他】

- 外国語学部では公開講演会、外国語村を計画実施した。
- 英米語学科では、大学院言語文化研究科と連携し、ペンシルベニア大学バトラー後藤裕子教授を招き、早期英語教育を話題とした公開講演会を開催し、学科教員も話題を提供した。
 - 中国語学科では外国語村の取り組みで「京劇体験講座」を実施した。
 - 韓国語学科では、外国語村が立ち上がったのに伴い、韓国語村を20回運用した。
 - 日本語・日本語教育学科では、外国語村の企画・立案について、日本語・日本語教育学科の教員と元JALP教員が協働で取り組み、煎茶マナー教室を開催した。多くの留学生、日本人に日本文化の1つを発信することができた成果をもとに、持続可能な企画を模索する。

(2)今後の課題

【教育】

- 2019年度末から新型コロナウイルスの感染拡大に伴う遠隔授業の対応が検討され始めた。大学教育の在り方につき新しい可能性と展開とを見通す。
- 各学科学生の語学関連の各種検定試験の受検率と合格率は近年順調に伸びていることから、この状態を維持展開する。
- 各学科で共通して取り組む「卒業研究」において、学生の取組み姿勢などに成果が表れつつある。今後もさらに質の高い結果を出すために、教員の指導上の工夫や努力が求められる。
- 学年全体の担任とクラス担任の業務分担を再検討する。
- 教員の課外活動、各委員会委員の業務が増加した。
- 業務増加による、助手業務の負担が課題として認識された。
- 各学科教育実習・語学実習の開設・充実に向けて、さらに詳細な事務手続き等を体系化し可視化して進める。
- 新カリキュラムの実施・運営とともに、引き続きカリキュラムの再点検を行う。

【研究】

- 学部各学科教員の研究は堅調に進展している。
- 新たな研究テーマに取り組む教員が多い。このため、未だ研究成果の公表に至らない研究も散見された。次年度は、より積極的に研究活動に取り組み、論文執筆や著書出版、学会発表などで成果を公表する必要がある。
- 科研費への応募をさらに進める。
- 研究時間の確保、学会活動の時間確保を図る。

【学生指導】

- 外国語学部では就職活動に消極的で進路決定に至らない学生が相対的に多数存在し、一層の指導の充実が求められる。
- 好調な就職内定率を維持するためにも、きめ細やかな進路指導を継続する必要がある。
- 学科教員の担当授業時間数が多い(半期6コマ担当を基準としながら、所属教員全員が半期8コマ以上を抱え、かつ、専門科目担当教員の1学生当たりの担当学生数が50名近い)学科があることの改善を図る。
- しよがいのある学生への対応について、継続して専門家からの知識や事例を参考にして取り組む。

【社会貢献】

- 学部各学科教員の社会貢献が堅調である状態を維持する。
- 大学の立地条件などから各教員の研究成果やキャリアを社会に還元する機会に恵まれている。今後もより一層社会貢献活動に意欲的な姿勢を示す。
- 各種取り組みへの大学からの支援を求めるための稟議を拡充する。外国語教育に関する講演会(外国語教育に従事する教員への教育講座)を設定することを検討する。

【組織マネジメント】

- 新型コロナウイルス禍により、組織マネジメント、運営が大きく変化し、コロナ後の大学教育にも影響があると予想される。時代の要請に応じた、より公平公正なあり方を希求する。
- 在学生の学力のさらなる質的向上を図る。初年次教育や専門科目および卒業研究などにおけるきめ細やかな指導を継続する。
- 大学、学部、学科の連携のなかで、教員配置の検討を進める。
- 助手業務の検討を進め、助手配置を再考する。

【その他】

- サバティカルが導入された場合の、学部各学科教員の業務を検討しておく必要がある。
- 留学が実施できなくなった場合が生じた際の、科目の代替策およびサイバー大学等との協定、施策も視野に入れて検討しておく必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	英米語学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①英語について習熟度別クラス編成をし、英語運用力強化に努めている。</p> <p>②英語教育、英語学、英米文学、ビジネス英語の4分野を柱として専門教育の充実を目指している。</p> <p>③10名前後で構成した3・4年次のゼミによって、卒業までの手厚い指導を徹底している。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①新型コロナウイルスの感染拡大に伴う遠隔授業で、因らずも大学教育の在り方について新しい可能性が開けたので、コロナ以降の学科教育について、人材育成目標に照らした一層の充実を図りたい。</p>			
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>英語教育・言語文化関連図書の出版（2件）；海外の査読付き学術誌での論文発表（2件）；国内の査読付き学術誌での論文発表（2件）；博士論文を早稲田大学に提出（1名、博士（文学））；国際学会のproceedingsでの論文発表（1件）；国際学会での研究発表（5件）；国内学会での研究発表（2件）；国内学会での招待講演（1件）；国内外の学術誌での投稿論文査読（国内1件、海外3件）；科学研究費による研究補助（6件、一件は代表者が転出）</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①学科教員の研究は堅調と判断できるので、この状態を維持したい。</p>			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①卒業後の進路指導について、就職内定率が90%を超え、学内でも上位に位置づけられた。</p> <p>②学科学生2名が、全国学生英語プレゼンテーションコンテストで入賞した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①進路の決定に至らない学生が男子学生に相対的に多く、一層の指導の充実が求められる。</p>			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①学会役員1件、地域連携2件、産学連携4件、その他社会貢献4件。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①学科教員の社会講演は堅調と判断できるので、この状態を維持したい。</p>			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①多岐に渡る学科業務分掌について、公平性を重視して、運営した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①コロナ禍で学科の運営は大きく変化し、コロナ後の大学教育にも影響があると予想されるので、時代の要請に応じ、より公平公正な学科運営を目指したい。</p>			
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①ペンシルベニア大学バトラー後藤裕子教授を招き、早期英語教育を話題とした公開講演会を開催し、学科教員も話題を提供した。</p> <p>(2)今後の課題</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	中国語学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入		
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①交換留学派遣先として、新たに華東師範大学、華東理工大学、東呉大学と提携し、それぞれ学生を派遣した。</p> <p>②日本航空主催の「JAL訪日研修団」として台湾の大学生らが来校、学科学生と交流活動をおこなった。（2019年7月4日）</p> <p>③外部講師を招聘し「台湾語講座」を開催した。（2019年11月4日）</p> <p>④立正大学経済学部田中ゼミと「中国の歴史」（選択必修科目）受講生による合同研究発表会を実施した。（2019年12月21日）</p> <p>⑤学科学生が2019年度JAL中国語スピーチコンテストに参加した。（2019年12月7日）</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①学科学生の中国語関連の各種検定試験の受検率と合格率は近年順調に伸びており、この状態を維持する必要がある。</p> <p>②「卒業研究」（論文執筆・作品制作）においても、学生の取り組み姿勢などに少しずつ成果が表れている。今後もさらに質の高い結果を出すために、教員の指導上の工夫や努力が求められる。</p>		
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①学科教員の研究論文掲載数は2件、書籍出版数は3件、研究発表数は4件であった。</p> <p>②学科教員2名の科学研究費（若手B・基盤C）の最終年度を迎え、当該研究に関する学会発表などを積極的に展開した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>今年度は、新たなテーマに取り組む教員も多かったせいか、未だ研究成果のアウトプットに至らないケースも散見された。次年度は、より積極的に研究活動に取り組み、論文執筆や著書出版、学会発表などで成果を公表する必要がある。</p>		
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①交換留学を終えた学生たちによる「留学報告会」を開催した。（2019年7月18日）</p> <p>②交換留学生と学科学生の交流活動の一環として、「国際交流バスツアー」を企画し、山梨県内を參觀した。（2019年10月26日）</p> <p>③外国語学部「外国語村」の活動の一環として、外部講師を招聘し「京劇体験講座」を開催した。（2020年1月30日）</p> <p>④卒業生の就職内定率は90%以上であり、好調な状態が続いている。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①好調な就職内定率を維持するためにも、きめ細やかな進路指導を継続する必要がある。</p>		
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①学科教員が、学校法人角川ドワンゴ学園N高等学校（通信制高校（広域）・単位制）で中国語事業全般（ネット授業の企画および実施、通学生向けのカリキュラムや教材の構築など）のコーディネーターを務めている。</p> <p>②学科教員が、テレビ朝日の番組「タモリ倶楽部」に出演し、中国の漢字について解説した。（2019年9月20日）</p> <p>③学科教員が、公益財団法人松下幸之助記念志財団主催の「松下幸之助国際スカラシップフォーラム」（2020年1月12日・於・東京大学）実行委員としてフォーラム登壇者の選考、登壇者向けプレゼンテーション講座開催などに携わり、若手研究者の育成支援をおこなった。</p> <p>④学科教員が、本学の地域連携・研究推進センターの活動の一環として、高齢者福祉施設「神楽坂」での中国語講座開催や、市民講座「きのえね会」での講演をおこなった。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①今年度は、各教員の研究成果やキャリアを社会に還元する機会に恵まれた。今後もより一層社会貢献活動に意欲的な姿勢を示すことが必要である。</p>		
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①学科業務全般において、教員間の連携がスムーズにおこなわれており、教育活動に関する諸情報を迅速かつ正確に共有できる体制を維持している。</p> <p>②入試では、昨年度に引き続き受験者数が安定的な増加傾向にある。</p> <p>③学科FDを実施し、学科のカリキュラム改編などの課題について建設的な討論をおこなうことができた。</p> <p>④学科の広報活動について、高校への出張授業や学科公式facebookによる情報発信などを積極的に展開した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①在学生の学力の質的向上が今後の課題である。初年度教育や専門科目および卒業研究などにおけるきめ細やかな指導を継続する必要がある。</p>		
その他	<p>(1)特筆すべき事項 特になし</p> <p>(2)今後の課題 特になし</p>		

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	韓国語学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ol style="list-style-type: none"> きめ細かい学生教育を実施している。 <ol style="list-style-type: none"> ①外国語村の「韓国語村」を年間20回実施した。目白大学の学生と韓国からの交換留学生の言語・文化の学習の場となり、留学への強い動機付けとなった。 ②「韓国語学科体育祭」を実施し、学年を超えた学科学生全体の融和を図った。 ③「韓国語学科映画祭」を実施し、社会(映画監督招待)と連携した韓国語教育を推進した。 ④「SINNARA」活動で学科学生のほとんどが「桐和祭」に参加した。 ⑤学科学生と交換留学による留学生とを融和させるよう「SINNARA」の活動を活性化させた。 2. 留学教育を充実させた。 <ol style="list-style-type: none"> ①夏・冬の2回、教員による留学先協定校視察を実施した。 ②協定校を訪問して、交換留学、D. D. 制度、J. D. 制度の在り方を検討した。 ③韓国語学科後援会と連携しながら、春・秋の2回、保護者説明会を実施した。 ④「韓国語学科歓迎会」「韓国語学科留学歓送会」を実施した。 ⑤留学関連情報を正確かつ迅速に学生に周知できる「留学手帳」アプリを始動した。 3. 卒業研究の充実を図った。 <ol style="list-style-type: none"> ①卒業研究中間発表会を「学科全体」で実施した。 ②卒業研究発表会を全ゼミが「ゼミごと」に実施した。 4. 学園主催の学科広報プロジェクト企画である「とんがりプロジェクト」にエントリーし、採択された。採択の支援金で、学科広報用のYouTube動画作成、学科オリジナルサイト作成、山手線の窓上広告を出し、学科の良さを広く広報することができた。 <p>(2)今後の課題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学年全体担任を無くしたことによるB.S担任の業務負担、SINNARAの活動内容、各委員の業務が増加した。 2. 業務負担による、助手業務の増加が課題として認識された。 3. 卒業研究の指導強化の必要性が論じられた。 			
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ol style="list-style-type: none"> ①各教員が著書・論文を鋭意、発表している(4名が発表した)。 ②各教員が学会等で研究発表をしている(3名が発表した)。 ③各教員がテキスト、副教材を開発している(全員)。 <p>(2)今後の課題</p> <ol style="list-style-type: none"> ①科研費への応募をさらに進める。 ②研究時間の確保、学会活動の時間確保に課題を感じる構成員が多い。 			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ol style="list-style-type: none"> ①韓国語基礎科目の能力別クラスの教育の連携を図った。 ②「フレッシュマン・セミナー、ベーシック・セミナー」「韓国事情」の教育内容の充実を図った。 ③留学教育の充実を図った。 ④卒業研究活動の充実を期した。 ⑤SA、TAの専門科目教育における学生指導との連携を模索した。 ⑥「韓国語村」を立ち上げて学習意欲を高めた。SINNARAの活動を支えた。 <p>(2)今後の課題</p> <ol style="list-style-type: none"> ①韓国語学科教員の担当授業時間数が多い(半期6コマ担当を基準としながら、全員が半期8コマ以上を抱える)。 ②専門科目担当教員の1教員当たりの担当学生数が50名近い。 			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ol style="list-style-type: none"> ①「韓国語学科映画祭」を実施し、また「桐和祭」で韓国文化展示や韓国料理の販売をすることで、近隣地域の活動と連携できるとともに、近隣地域の韓国語・韓国文化に興味を持つ人々への韓国文化紹介が可能となっている。 <p>(2)今後の課題</p> <ol style="list-style-type: none"> ①韓国語学科映画祭への大学からの支援を求めたい。 ②韓国語教育に関する講演会(韓国語教育に従事する教員への教育講座)を設定したい。 			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>(2)今後の課題</p> <ol style="list-style-type: none"> ①学部と連携しながら、学科の教員配置の検討を進めたい。 ②助手業務の検討を進める。 			
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ol style="list-style-type: none"> ①外国語村が立ち上がり、韓国語村を20回運用した。 <p>(2)今後の課題</p> <ol style="list-style-type: none"> ①サバティカルが導入された場合の、学科教員の業務を検討しておく必要がある。 ②留学が実施できなくなった場合が生じた際の、科目の代替策およびサイバー大学との協定も視野に入れて検討しておく必要がある。 			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称 (評価单位名称)	日本語・日本語教育学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入		
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①来年度の日本語教育実習の開講に向けて、国内および海外の協定校との連携・協力体制が整った。体系的な教育システムができつつある。 海外協定校：台湾（東呉大学、世新大学）、韓国（高麗大学校）、オーストラリア（サマビルハウス）、国内日本語学校3校。</p> <p>②新カリキュラムが現状に合致しているかどうか等について、実施・運営しながら調整・点検をおこなった。</p> <p>③日本語教育センターの改編に当たっては、学科における新体制としての人事を行い、教育実習科目を充実させるための調整を行った。また、センター改編に伴い、日本語教育支援室の場所の確保や図書、備品などを補充し、日本語教育全体の質の担保と充実を図った。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①日本語教育実習の開設に向けて、これまで準備してきたことを体系化し、さらに詳細な事務手続きを進めていく予定である。</p> <p>②新カリキュラムの実施・運営とともに、引き続きカリキュラムの再点検を行っていく予定である。</p>		
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①競争的獲得資金（代表）の科研究費助成に継続4件が採択された（基盤C「東南アジアにおける「学び合う教師コミュニティ型教師研修」の広がり と 継続性の構築」、基盤C「海外の日本語学習者と日本語教師のピリーフに関する調査票の新たな開発とその検証」、若手研究「日本語学習者のための 漢字学習方法・意識の調査票の開発と多言語化」、若手研究「第二言語としての日本語のリズム習得を目的としたHVPTに関する基礎研究」）。</p> <p>②学術誌4本（単3、共1）、論文集2本（単2）、目白大学紀要1本（単1）、他大学紀要1本（共1）が刊行された。</p> <p>③海外における基調講演2件（ベトナム、インドネシア）、国内における講演1件、国際大会で研究発表（全2件：カナダ）、国内の学会発表（全7件）、海外提携大学との共催による日本語教師研修の実施(2件)などが行われた。</p> <p>(2)今後の課題</p>		
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①グローバルナレッジシリーズが継続的に行われ、学生にとって様々な体験や広い視点を獲得する場となっている。</p> <p>②昨年に続き、しょうがいのある学生については、専門家や学生課、学科教員と連絡をとりながら対応にあたった。また、教員FD研修において専門家を招き、其々の事例をもとに話し合った。これにより、十分ではないが教員間で共通認識をつくることができるようになった。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①しょうがいのある学生への対応について、継続して専門家からの知識や事例を参考にして取り組みたい。</p>		
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①教員がベトナム、インドネシアにおける学会や大学に招聘され、日本語教育に関する基調講演をおこなった。</p> <p>②日本語教育センター教員が落合第三小学校との交流活動において、本学留学生を引率し、日本文化、遊び、給食を共に食べる活動に参加した。</p> <p>③教員が港区（東京プリンスパークタワー）で行われた「令和に関する講演会」において、一般の来客者むけの講演を行った。</p> <p>④当該学科の学生が「特定日営利活動法人 みんなのおうち」が主催する外国にルーツを持つ子ども（新宿区）の日本語、教科学習、母語支援活動に参加した。</p> <p>(2)今後の課題</p>		
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>(2)今後の課題</p>		
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①外国語村の企画・立案について、日本語・日本語教育学科の教員と元JALP教員が協働で取り組み、煎茶マナー教室の開催をすることができた。多くの留学生、日本人に日本文化の1つを発信することができたことは、1つの成果である。持続可能な企画を模索していきたい。</p> <p>(2)今後の課題</p>		

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価单位名称)	保健医療学部
評価対象年度	2019年度		
記入者 (評価単位責任者)	職名	学部長	
	氏名	矢野 秀典	

(1)特筆すべき事項

【教育】

保健医療学部は、3つのリハビリテーション専門職を養成する課程で構成されている。医療専門職としての知識のみならず、専門技術の習得が必要となる。その中で、アクティブ・ラーニングの導入が進み、学生自らの力で知識や技術を修得できるようになってきている。卒業後にも、この力は専門職として臨床で活躍するために役立っていくと考えられる。

理学療法士・作業療法士法の指定規則が2020年度入学生から改定となっている。2019年度には、この改定に適合するように、理学療法学科・作業療法学科の新カリキュラムを編成し、文部科学省および厚生労働省に登録した。

【研究】

2019年度内に3学科合計で56本の論文を投稿した。そのうち11論文が英文による論文であり、教員の学術活動は活発である。

出版物も12件、学会発表も64件（うち、海外発表21件）と多くの研究成果を残した。

科研費採択課題は、新規・継続を含め作業療法学科教員が4件採択されている。また、学内研究助成金の佐藤弘毅記念教育研究助成金（ビデオ・リフレクションを用いた臨床技能習得度評価方法の開発：臨床実習前のOSCEにおける学生の気づき内容を知る）も獲得した。

【学生指導】

3学科すべてで学外での臨床実習が必要である。そのため、臨床技術向上の目的で理学療法学科・作業療法学科では、積極的に3年次生から客観的臨床試験（OSCE）を取り入れている。また、作業療法学科では、新たにpre-OSCEも導入している。

また、全学科において、国家試験に対応する対策を少人数グループもしくは個別指導にて丁寧に時間をかけて実施している。結果として、全国平均の合格率を大きく上回っており、2019年度は、特に理学療法学科・作業療法学科で合格率が高値であった。

理学療法学科では、3年次生秋学期に保護者を独自に開催し、保護者に対して、卒業までの学生の学習・実習・就職・卒業研究などについて詳しく説明し、保護者と協力して学生の指導にあたっている。

言語聴覚学科では、新宿キャンパスへ複数の学生が転学科して異動した。医療系学科へ入学する学生は、概ね学科や目指す専門職へのイメージが出来ているが、中には、そのイメージが十分ではなく、入学後にその齟齬が生じて退学となるケースもある。今回は、新たに学年制限が緩和された転学科の制度を利用して、退学せずに本学他学科で学習継続ができたことは、とても良かったと考える。

【社会貢献】

多くの教員が、日本めまい平衡医学会、日本リハビリテーション連携科学学会、日本高次脳機能障害学会、大学教育学会などの学術学会の理事や評議員を務め、学術的に社会貢献をしている。日本理学療法士協会代議員、埼玉県作業療法士協会理事、埼玉県理学療法士会理事など職能団体役員としての活動も積極的に行っている。

地域との連携事業にも多く携わっており、埼玉国際マラソン・ランナーケア・ブース出展、母子通園施設の支援活動、岩槻区タウンカフェ・ファンリテーター活動など、3学科で計43件もの地域連携活動を実施している。

また、全日本空手道連盟ナショナルチーム強化スタッフや日本グランドゴルフ協会スタッフ、日本知的障がい者陸上競技連盟チームドクター、東京2020パラリンピック競技大会アドバイザーなどの健康者・障がい者のスポーツ活動を支援する活動も多く行っている。

【組織マネジメント】

理学療法学科では、指定規則改定に対する対策として、通常の組織以外に実習関連対策プロジェクト、臨床実習指導者養成プロジェクトを立ち上げて運営している。作業療法学科では、教員を基礎教育担当グループと専門教育担当グループの2つに分け、それぞれの問題の解決に向けて活動している。言語聴覚学科では、学科教員それぞれが自身の役割を果たせるように学科長中心に学科内組織をまとめて運営している。

【その他】

同窓会組織と本学教員とでFD活動として合同研修会を開催し交流を図った。臨床実習指導者経験のある本学卒業生を実習指導のためのセミナー講師として招聘し、学生に対して講演してもらった。OSCE実施の際にも国家資格を持つ卒業生をアドバイザーとして招聘した。

(2)今後の課題

①指定規則改定に対する対応

指定規則改定に合致したカリキュラムはすでに完成しており、学内指導面では大きな問題は生じないと考える。今回の改定で最も大きいものは臨床実習に関するものである。まず第一に、実習施設の指導者が厚労省の指定する講習会を受講した上でないと学生を指導することができなくなったことである。日本理学療法士協会と日本作業療法士協会は、それぞれ講習会プログラムを作成して都道府県士会単位で講習会を実施することにしている。

埼玉県では、理学療法士会は各養成校単位で、作業療法士会では県士会全体として研修会を実施することとなった。我々の学生の臨床実習を継続するためには、実習施設の職員にこの講習会を受講してもらわなければならない。理学療法学科では、養成校単位で研修会を開催しなければならないため、学科教員および事務局実習支援担当者の負担が非常に大きくなってしまった。

また、講習会開催のための予算も必要となる。作業療法学科でも、県単位で実施する講習会に協力するため、負担は増大する。第二は、臨床実習の形態を従来型から、クリニック型へと変更しなければならない点である。

作業療法学科では、今までもクリニック型で実習を実施していたので問題はないが、理学療法学科では、実習に関する書式などすべてのものを改訂する必要がある。

②入学定員の確保

ここ数年、作業療法学科と言語聴覚学科では入学者が定員人数を割っている。高校生にとって作業療法士・言語聴覚士の認知度が足りない、少子高齢化で高校生自体が減少しているなどの理由が考えられてきたが、学部全体およびキャンパス教職員全体として、この定員割れ問題に取り組むべきであると考えられる。また、作業療法学科の教員内では、定員の削減も検討して欲しいとの要望もある。

③学生の質について

3学科すべてにおいて、入学者の偏差値はこの数年低下し続けている。この傾向は、本学だけではなく、他のリハビリテーション関連職種養成校共通の問題である。今年度以降は、コロナ禍で変化してくる可能性もあるが、どうしても、文系人気で医療系の偏差値が低下してしまう。基礎学力が低いと勉強についていけずに中退してしまうケースも多い。上述の定員割れ問題と中退問題、国家試験の合格率は、この学生の質の問題がベースになっている。高校生にとって魅力のある学部となり少しでも学生の質を上げていきたい。PT・OT・STの3学科を持つ大学は意外と少ないので、現在はコロナ禍で難しいが、リハビリテーション職種の連携をアピールしていきたい。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	理学療法学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①OSCEなどの臨床実習に向けた講義や実技指導を多く実施した。</p> <p>②国家試験対策特別委員会を発足し、成績不良者に対し特別課題を課すなど、今年度からより積極的に国家試験対策指導を実施した。</p> <p>③2019年度は、昨年度よりも国試合格率は大幅に向上し、全体、新卒において全国平均を上回った。</p> <p>④ディスカッションや小テストの導入などのアクティブラーニングを継続して実施した。</p> <p>⑤3年次秋学期に保護者会を開催し、保護者とともに学生への支援を行った。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①学生の学力に応じた教育方法を検討する。</p> <p>②コロナ禍での国試対策を余儀なくされているが、2020年度理学療法士国家試験でも、今年度と同等の合格率を維持する。</p>			
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①海外の学術誌に4編が掲載された。（昨年度より増加）</p> <p>②国際学会に7演題を発表した。（昨年度より増加）</p> <p>③めまいに関する運動療法に関して目白大学クリニックと引き続き共同研究を実施している。</p> <p>④学術学会の常任理事などの役職につき、学術活動に貢献した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①科研費などの外部競争的資金を獲得できるように努力する。</p> <p>②研究に取り組む教員が固定されているので、多くの教員の研究活動を推進する。</p> <p>③大学院教育と学部教員の研究活動を連動させたい。</p>			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①OSCEなどの臨床実習に向けた講義や実技指導を多く実施した。</p> <p>②ディスカッションや小テストの導入などのアクティブラーニングを継続して実施した。</p> <p>③3年次秋学期に保護者会を開催し、保護者ととともに学生への支援を行った。</p> <p>④2年次春学期より最低週2コマ以上のゼミでのグループ学習を課しており、学習習慣を付けることができた。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①中途退学を防止する学生指導法方法を検討する。</p> <p>②成績不良学生へのさらなる対策を検討する。</p> <p>③遠隔方式での学習効果向上策を検討する。</p>			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①理学療法士協会などの専門職団体の活動に複数の教員が参加した。</p> <p>②地域の知的障がい児スポーツ事業への参加した。</p> <p>③さいたま国際マラソンにおいてランナーケアサポートブースを出展実施した。</p> <p>④埼玉県車いすテニス協会サポートを行った。</p> <p>⑤複数の市町村における介護予防事業に参加した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①様々な社会貢献活動の場を得ることができてきたので、さらにはその質についても高めたい。</p> <p>②学生ボランティアやサークル活動の広報活動を行いたい。</p>			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①理学療法に関する指定規則改定に向けて、実習関連対策プロジェクト活動の実施。</p> <p>②指定規則改定に伴い、臨床実習指導者養成プロジェクトを組織した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①一人の様々な会議委員やプロジェクト委員として重複していて業務が重くなっており、引き続き対策が必要。</p> <p>②現在の会議等の見直しも検討する。</p>			
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①日本オリンピック委員会強化スタッフとして教員が関わった。</p> <p>②本学科独自の同窓会組織である目白理学療法士会とのFD活動として合同研修会を実施した。</p> <p>③本学科卒業生を招聘し、在学生へのセミナーを実施した。</p> <p>④3年次OSCEの際に指導者として本学科卒業生を招聘し、在学生と卒業生との連携を促した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①本学および本学科のネームバリューを上げるような活動を検討する。</p> <p>②臨床実習指導者は研修会受講が義務付けられるので、研修会を開催。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	作業療法学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①学習する内容やその主目的に応じて、学習方法を選択するようになった。専門教育では個別の事例や技術を要する学習に対し、アクティブラーニングの導入が進み、ルーブリックが一般的な教育アイテムとして定着してきた。</p> <p>②作業療法士養成規則の改定が行われ、2020年度入学生から対象となるカリキュラムの変更を行った。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①今後さらに効果的なオンライン授業の進め方を検討しさらに改良する必要がある。その中でアクティブラーニングの導入を引き続き進めるための工夫を学ぶ必要がある。</p> <p>②感染予防に立った演習授業の進め方、感染予防に立った臨床実習を検討し実行する必要がある。</p> <p>③オンライン学習ツールの効果的な運用について学ぶ必要がある。</p> <p>④カリキュラムの変更にも臨床現場や専門職の実態が追いついていないため、それに応じたカリキュラム（臨床実習）の変更を行う必要がある。</p>			
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①科研費採択課題は新規・継続を含め、4件（會田教授、時田教授、花房教授、金野専任講師）であった。年度の終盤になり、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、人間を対象とする研究の進行がさまたげられてしまった。</p> <p>②目白大学リハビリテーション学研究所、筑波大学大学院障害発達専攻との共催を得て、科研費課題によりDr. Alan Weintraub氏招聘講演「アメリカにおける頭部外傷リハビリテーションの実践と研究」を行った。さいたま岩槻キャンパスでとり扱った、初めての招聘講演であった。</p> <p>③佐藤弘毅記念教育研究助成を受け、「ビデオフレクションを用いた臨床技能習得度評価方法の開発：臨床実習前のOSCEにおける学生の気づき内容を知る」研究を学科で行った。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①昨年の佐藤重遠記念教育助成にて研究を実施できたように、作業療法学科あるいは学部で取り組む教育実践に根差した研究を企画する。役職などのため、研究を実施しにくい教員や任期の定められた教員も業績を積むことにもつなげられる。</p> <p>②コロナ禍における人を対象とする研究の実施方法について研究計画を含め、情報交換し、検討する。</p>			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①2019年度作業療法士国家試験の結果、新卒国家試験合格率97%（全国95.1%）、新卒+既卒合格率は95.1%（全国87.3%）であった。フォローした既卒学生も現役学生と変わらない効果が表れた。また、年度途中で導入いただいた国試学習システム「スマコク」の運用の効果があつたと考えられる。</p> <p>②作業療法士養成規則の改定が行われ、カリキュラムの変更を行った。その中でも臨床教育において、目白大学作業療法学科は新しい臨床実習方式であるクリニカルクラークシップを開学当初より実施しており、著作、特集、研究や学会発表、研究会運営などを小林幸治准教授を中心に精力的に行い、常に作業療法臨床教育におけるトップを走っている。さらに2019年度よりクリニカルクラークシップの第一人者である花房謙一教授を迎え、CBTおよびPost-OSCEの実施などさらなる試みを精力的に実施した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①国家試験対策は、今までの利点を生かし、より組織的な運営のもとに個々の教員の負担を減らし、最大限の効果をあげられるようマネジメントする。</p> <p>②今後も臨床現場への対応と、意欲的に自ら学ぶことのできる作業療法士を育成するために、1～2年間の準備期間を経て、臨床実習全時間数の割り振りおよび若干の領域の変更が必要であると考えている。今後も作業療法臨床教育の進展に、学科として精力的に実践し、発信していきたい。</p>			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①埼玉県、さいたま市、岩槻区および東京の自治体や地域の支援団体や市民サークルなどでの社会貢献活動が多く、各教員がそれぞれのキャリアを活かした社会貢献活動を幅広く行っている。作業療法学科では学会での活動よりも地域社会での活動が圧倒的に多い。</p> <p>②作業療法学科が関与する岩槻区との地域連携活動は多数あり、岩槻区の住民団体と良好なつながりを育んでいる。台湾中山大学からの短期留学プログラムを大学の地元に根差した体験として計画実施できた。また、大学の地域貢献の継続から、ぜひこの学生をうちの事業所にほしいと乞われ、卒業生が岩槻のNPOが設立する障害者就労移行支援事業所に就職した。</p> <p>③クリニカルクラークシップに関するセミナーや講演、依頼原稿などを小林幸治准教授、花房謙一教授を中心に多数行った。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①コロナ禍における住民活動のありかた、その支援方法について検討する必要がある。</p> <p>②地域障害者支援活動へのオンラインの導入や映像を用いた住民への教育活動、感染予防対策を施した支援活動について検討する必要がある。</p> <p>③引き続き、クリニカルクラークシップの教育、研究、実践に基づく発信を進める。</p>			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①2019年度より花房謙一教授（2018年度8月に逝去された矢崎潔教授の後任）が着任した。数少ないプロパーの教授を採用することができた。</p> <p>②2019年度末の毛束教授の退任にともなう補充はなかった。その代わりに、学部として2020年度より精神医学の教授を採用した。また、2019年度末に館岡周平助教の退職があった。</p> <p>③教員を基礎教育担当グループ、専門教育担当グループの2グループに分け、それぞれの問題の解決に向けて話し合うことと、プロパー教員が実習担当あるいは国家試験担当の2グループを中心に組織的に教育指導を行うことが定着している。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①ノンプロパー教員は全員教授であるが、プロパー教員は教授（2）、准教授（5）、専任講師（3）、助教（2）であり、作業療法の各領域に教授が配置されていないため、業績、学内貢献度の高い准教授を教授に昇格させ、作業療法の主要領域に教授を配置させたい。</p> <p>②教員の負担を軽減し、また教員による負担の差異を軽減し、効果的な教育指導を行うための学科の組織的運営について常に検討する必要がある。</p>			
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①定員割れが2年続いた（50名程度/定員60名）。保健医療分野の志願者が全体に少ない傾向にはあつたが、大変危機感を持っている。それに伴い、学力の低下が懸念される。学力の低下は学内教育と中途退学率、その結果である国家試験に影響を与える。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①新型コロナによる医療機関の働きが報道されているが、差別もあるように医療専門職に対する志願者数の氷河期が懸念される。学科の入試戦略について専門家の意見を聞きたい。同じ学部でも大学数、志願者数、競合校など置かれた状況は異なるため、保健医療学部全体ではなく作業療法学科に詳しいコンサルトを得て対策に臨みたい。</p> <p>②1クラス運営について検討する（現在2クラス運営）。</p> <p>③入学定員の削減について検討する。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	言語聴覚学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①言語聴覚学科学生の会話能力向上を目的とした段階的指導プログラムの実施。 ②初年次に卒後のキャリアを思い描けるような取り組みを実施。 ③体系化された言語聴覚士国家試験対策指導の実施。 ④臨床を想定した授業の実施 ⑤初年次のリテラシー向上への取り組み。 <p>(2)今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ①日本語力が乏しい状態で入学してくる学生の日本語力、とりわけ読解力と書字能力の向上のさらなる取り組み。 ②DVD教材「言語聴覚士養成 臨床における会話能力」の続編の作成。 ③基礎科目と専門科目の継続性を明示できる授業展開の促進。 ④国試合格率の向上。 ⑤授業可能な耳鼻科医の持続的な確保。 			
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①他学科との共同研究の実施。 ②複数の教員による国際学会での研究発表。 ③英文誌の論文掲載。 ④複数の教員が科研費を獲得。 ⑤特別研究費助成を受け「言語聴覚学科学生の会話能力向上プログラム（向上に必要な要素の抽出と段階的アプローチ）」に複数教員が協力して取り組んでいる。 <p>(2)今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ①研究業績のさらなる向上。 ②競争的外部資金の獲得の推進。 			
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①複数回のクラス全員との個別面談に加え、問題が発生しそうな学生への頻回の個別面談など、担任を中心としたきめ細やかな学生指導の実施。 ②複数の学生の転学科。 <p>(2)今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ①発達障害が疑われる学生への指導。 ②中退者数の減少。 ③必要な学生における早期の方向転換、特に転学科の促進。 ④社会の一員としての自覚や行動を促す取り組み。 			
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①複数教員が特別支援学校、ことばの教室、児童発達支援センター等で専門性を発揮した貢献を実施。 ②患者会などにおける専門性を活かした支援。 <p>(2)今後の課題</p>			
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①それぞれが自身の役割を果たすとともにスムーズな学科運営を意識して職責を果たした結果、良好な組織マネジメントが行えた。 <p>(2)今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ②目白大学耳科学研究所クリニック専任教員のマネジメントのクリニック院長への移管。 			
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>(2)今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ①受験生の確保。 ②入学生の増加。 			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	総括評価シート	組織名称 (評価单位名称)	看護学部
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	学部長	
	氏名	堤 千鶴子	

(1) 特記すべき事項

【教育】

2019年度は、保健師助産師看護師法施行令第13条第1項の規定により文部科学省に承認された教育課程の変更1年目（新教育課程）の運営及び旧教育課程の並行運営が滞りなく実施され、成果を残した。この毎年度の評価は、分野別機構評価へとつながっており、評価の受審の時期は、大学の機関別評価終了後、そして現行カリキュラム完成年度後を目途として準備を進めている。検討には「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」「看護教育モデル・コア・カリキュラム」を参考にした。看護系人材として求められる基本的な資質と能力は ①プロフェッショナルリズム ②看護学の知識と看護実践 ③根拠に基づいた課題対応能力 ④コミュニケーション能力 ⑤保健・医療・福祉における協働 ⑥ケアの質と安全の管理 ⑦社会から求められる看護の役割の拡大 ⑧科学的探究 ⑨生涯にわたって研鑽し続ける姿勢 であり、カリキュラム構築において最も重要視された軸である。

また、学部の3pの見直しと検討により、学部の方針とカリキュラムの整合性を図った。

2022年度に予定されており、COVID-19影響により進捗の途絶えている看護師・保健師教育課程の大型改正に備え、現段階での履修モデルや履修ガイドを作成し、学生・教員に周知している。2020年度には改正カリキュラムのための作成チームを発足させる。

文科省・厚労省の推進するシミュレーション教育を積極的に取り入れるため、2018年度は情報収集のために教員を研修などに参加させ報告会を設けた。今年度は、各専門領域が実施しているシミュレーション教育についてその実施方法と効果の共有を図るため学部のFDで取り上げ好評を得た。今後はシミュレーターの実施のための対策に着手する予定である。

【研究】

外部資金獲得や学会発表、専門誌への投稿および準備については昨年増加傾向にあり、今後も継続維持が期待できる。教員の中山醫學大學への派遣は、新型コロナウイルス感染症蔓延のため、中止とした。今後、感染症の収束を待ち教員派遣を継続して研究的刺激や海外での研究発表活動の機会とする。

【学生指導】

入学前教育の見直しを図り、受講科目と回数を増やし入学後の学びに備えた。学生の参加度は100%であり、委託業者の手厚いサポート（提出の滞っている受講者へのこまめな連絡や教員へ適時報告）も功を奏した。中途退学者の対策については、置く学生には早期に教員が情報交換し、継続した手厚い対応により効果をあげた。学生の就職支援、キャリア形成支援を目的とする「卒業生と語る会」は継続実施し、卒業生、在学生共に好評を得た。

学生確保においてはオープンキャンパスの内容検討など試行錯誤しながらも多角的に対策・実施した。近辺に看護学部が開学していることもあり、学生確保及び在学生の実習地確保が今後困難になることが想定される。改正カリキュラムは、包括ケアを中心に据えた構想であることから包括ケアに関する実習地の開拓を急ぐ必要がある。

第119回看護師国家試験の合格率は96.4%、第106回保健師国家試験の合格率は100%であった。恒例となった新卒卒業生サポートのための「看護学部ホームカミングデー」は通知に一部不手際があったが例年通り実施した。就職先病院側からの参加のための日程調整などの協力も例年通り好意的に得られた。

年度末のCOVID-19蔓延のために、実習病院の就職説明会影響が危惧されたため、各施設へ学生向けの冊子の配布依頼及びVTR放映などの対策を講じた。

【社会貢献】

自治体や実習施設から依頼される講師派遣を積極的に行った。特にさいたま市主催による防災訓練、委託事業公開講座、さいたま市岩槻マルシェin目白大学さいたま商工会議所SMAP事業に貢献した。また、各教員が所属する学会でのそれぞれの役割からの貢献を行った。

【組織マネージメント】

学科内の規定の見直し・検討を行った。教育課程において特に実習地の多様化が推奨されているが、多様化することによる対外的事務処理事項が増加している。そのため事務処理などのスリム化と現状の運営効率化を図る必要があり、一部対応したが改正カリキュラムではさらに複雑化することが予測される。特に実習に関する事務手続き関係及び実習内容打ち合わせに係る複雑な業務の効率化を図るため、すべての委員会活動をマニュアル化し共有しやすく改善したが、改正カリキュラムへの対応がさらに必要である。

会議開催の効率化については、スリム化のために議題の整理を安易に行うことによって課題達成のための議論の機会縮小の可能性があるため、継続検討する必要があり、会議間の重複についても今後検討する。

看護基礎教育内容の複雑化・広範化が続く中、指定規則による各専門領域の占める科目数や単位数格差が生じている。専門職教員の領域配置については、教育課程改正と連動して見直す必要がある。今後も看護学部新規開設が予定されていることから、学生の確保と同様に教員の確保については最大限注視していく必要がある。

2名の65歳以上教授の勤務体制変更に伴う業務内容を検討し、研究日の確保および業務量の調整を行った。

(2) 今後の課題

①COVID-19が収束に至らない場合の授業（特に演習、実習）及び学生支援行事や就職活動支援などの対策及びそれに伴う業務負担への対策。

②2020年度開始の改正カリキュラムに向けて、現行カリキュラムの評価と並行したカリキュラムの検討及び改正カリキュラムに対応する実習地開拓。

③教員の任期及び退職に伴う教員交代が続くことによる、教員の教育力・学部内業務マネージメント力の停滞への対策。

④学生のSPISチャレンジ等の社会貢献への環境づくり。

⑤入試体制変更のための評価基準の検討。

⑥会議のスリム化と業務の見直し・改善。

⑦教員の研究環境の整備。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	看護学科
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入		
教育	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①2019年度は、2018年にモデルコアカリキュラムとして改訂した内容を実施した1年目であり、旧教育課程の運営と並行し、特に支障なく進めることができた。</p> <p>②学部のポリシーの見直しと作成を行った。</p> <p>③教務委員会を中心として、新カリキュラム用の履修モデルや履修ガイドの作成を行い、学生および教員の周知を図った。</p> <p>④中山醫學大學へ短期留学の予定者がいたが、COVID-19の流行の兆しがあったため学部として中止を決定した。プログラムに事前課題と説明（台湾の歴史・文化、医療等）を追加していたため、国際看護の一部を学ぶ機会を提供することができた。</p> <p>⑤各専門領域がシュミレーター教育の充実を図れるための対策として、学部のFDに取り入れ好評であった。</p> <p>⑥授業の「災害看護」と岩槻市の災害訓練との連携をとり、桐祭祭での成果発表等に取り組んだ。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①今後予定されている指定規則によるカリキュラム改訂による検討。</p> <p>②指定規則の改訂の中に、シュミレーターを使用した演習教育の充実があげられており、購入および教育方略の計画。</p>		
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①実習施設、自治体から依頼される講師等の連携を継続し、実習施設との関係性を維持した。</p> <p>②若手教員の研究推進を図り、紀要の投稿は増加傾向にある。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①外部資金の獲得の推進の継続。</p>		
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①看護師国家試験合格率96.4%、保健師国家試験合格率100%、就職率100%であった。</p> <p>②国家試験対策の補講と従業内容との調整および見直しを行った。</p> <p>③学生の就職支援およびキャリア形成支援を目的とした「卒業生と語る会」を継続した。国立3病院に加えて、国立精神神経医療研究センターの卒業生も招いた。学生の学修への動機づけとなり好評であった。</p> <p>④就職説明会は、COVID-19の感染拡大から中止とし、資料のみの配布となった。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①COVID-19の問題が継続する場合には、「卒業生と語る会」や「就職説明会」等の開催企画の検討が必要である。</p> <p>②国家試験対策の補講時間については、学生の学修状況により内容、方法の検討が必要である。</p>		
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①自治体や実習施設で依頼される講師等の教育支援の連携を維持した。</p> <p>②各教員が専門とする所属学会での役割による社会貢献等を維持した。</p> <p>③学生への教育と連動してSPISチャレンジ制度への取り組み。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①学生のSPIPチャレンジ等の社会貢献との連携の推進。</p>		
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①学部内の規定の見直しを図り、実習規定について現状の組織運営上に見合った内容に改善した。</p> <p>②学科内での各委員会の効率化を図るため、マニュアル化等の推進を図り一部軌道（入試、実習）に乗り始めた。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①教授、准教授の退職および65歳以上の教授による勤務体制の変更があり、業務内容の検討。</p> <p>②教員の教育力およびマネジメント力向上のための検討の継続。</p>		
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①入学前教育の見直しと受講科目と回数を増やした。フォローアップ研修では、グループワークのファシリテーターとして在学生の参加と交流を計画し、効果が得られた。</p> <p>②入試課の協力のもと入試広報内容を見直した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①入試体制の変更にともなう評価基準の見直し。</p> <p>②大学・学部のポリシーと評価基準との一貫性を見直しを図る。</p>		

別 科

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		別科用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	留学生別科
評価対象年度			2019年度	
記入者 (評価単位責任者)		職名	留学生別科長	
		氏名	太原 孝英	
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入			
教育	(1)特筆すべき事項 ①在学生の日本語力を測定するための習熟度テスト (J-Cat) を半年ごと (学期開始前および学期終了時) に実施している。学期終了時の各学習者の点数を開始時と比較した結果、いずれのレベルにおいても、テスト得点 (平均点) に伸びがみられ、留学生別科での学習効果が確認された。 ②日本文化研修 (5月上旬・日光東照宮および日光江戸村) を通して、日本文化体験の機会を提供し、日本への関心を高め、日本文化理解を促進した。 ③専任教員および非常勤講師の授業力向上や研究能力の育成を目的として、「JALP日本語教育研究会」を年2回 (9月・3月) に開催した。 ④例年通り、国際交流課が実施する「日本語チューター制度」のコーディネートをを行い、日本人学生と留学生がより活発に交流できるよう配慮した。			
	(2)今後の課題 ①留学生 (JALP生、交換生) の多様な学習ニーズに応じた教育を提供し、それぞれの目標達成に導くような指導を行う。			
研究	(1)特筆すべき事項 2019年度の留学生別科における教育に関係する研究成果は以下の通りである。 【論文など】 ・鈴木秀明 (2020) 「初級レベルのポスター発表に向けた準備活動-教科書で学んだ言語知識を運用力につなげる-」『筑波大学CEGLOC日本語教育論集』第35号pp13-32 (共著) ・鈴木秀明 (2020) 「ケース学習を用いたキャリアデザインの指導」『目白大学 授業力向上のためのハンドブック vol.1 アクティブ・ラーニング実例集』 (単著) 【発表など】 ・高橋恵利子 (2019) 「実践報告: ディクトグロスで学習者は何を話し合うのか」CAJLEカナダ日本語教育振興会年次大会 (カナダ: ビクトリア) 単独: ポスター ・高橋恵利子 (2019) 「Effects of native language and accent type on L2 production, perception and monitoring of Japanese lexical accent」Pronunciation in Second Language Learning and Teaching (アメリカ: アイオワ) 共同: ポスター ・鈴木秀明 (2019) 「ケースメソッド教授法を活用したキャリアデザインの授業設計」日本語教育学会春季大会 (つくば国際会議場) 単独・口頭発表 ・鈴木秀明 (2019) 「全員レビューを用いた研究計画書の実践報告」CAJLEカナダ日本語教育振興会年次大会 (カナダ: ビクトリア) 単独: 口頭発表 ・鈴木秀明 (2020) 「上級学習者の要約文に見られる問題点」アカデミックジャパニーズグループ研究会 (東京海洋大学) 共同: ポスター			
	(2)今後の課題 ①現在以上の研究時間の捻出。 ②複数の研究課題の並行的遂行および成果発表 (学術雑誌への投稿等) ③2020年4月より交換留学生を中心とした「外国語としての日本語」プログラムが始動することから、新プログラムの教育実践にかかわる研究 (アカデミック・ジャパニーズ) も進める必要がある。			
学生指導	(1)特筆すべき事項 ①各学期開始後に各クラスで学生の個別指導および面談を行った。また、年2回に進路指導ガイダンスと追加で複数回の個別指導を行った。その結果、別科生大学進学希望者3名が大学進学、専門学校進学希望者8名が進学を果たした。			
	(2)今後の課題 ①2020年度在籍中の進学希望者 (大学院、専門学校) に対しては、引き続き本人の意向を踏まえた上で受験計画を立てさせ、専任教員が指導する。			
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ①継続的に実施している国際理解教育を目的とした行事として、新宿区立落合第三小学校を2020年1月に訪問した。同校の小学生からは日本の伝統的な文化や遊びの紹介があった。また、留学生別科の学生からは各母国の言語や習慣、子供に人気のある遊びなどを披露し、異文化交流に貢献した。 ②留学生別科専任教員はそれぞれ日本語教育に関係する学会において役員などの役割を果たし、貢献した。 (久保田美子) 日本語教育学会常任理事。学会誌『日本語教育』『言語政策』『社会言語学』査読。 (高橋恵利子) 大学日本語教員養成協議会事務局担当。第二言語習得研究会学会誌査読委員。 (鈴木秀明) アカデミックジャパニーズ学会編集委員および担当役員。日本語教育学会チャレンジ支援委員会委員。			
	(2)今後の課題 ①近隣地域の小学校との異文化理解交流行事には引き続き積極的に参加し、地域交流にも貢献する予定である。			
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ①現行の留学生別科が2021年3月に終了するため、在籍中の留学生や非常勤講師への今後の予定に関して説明会を実施した。 ②2020年4月から交換留学生を対象とした「外国語としての日本語」プログラムが始動するにあたり、2019年度は新プログラムの開発作業を完了した。専任教員4名で、総時間数、科目名称、単位数に関して修正作業を行い、教養教育機構副機構長である副学長や外国語学部教員との調整会議も実施した。			
	(2)今後の課題 ①「外国語としての日本語」プログラムを円滑に運営するために、学内の関係部署 (教務課、国際交流課、人事課等) との連携を緊密にする。			
その他	(1)特筆すべき事項 特になし			
	(2)今後の課題 ①留学生別科の最終年度および「外国語としての日本語」プログラムが同時に進行するので、関係部署 (教務課、国際交流課、人事課等) と連携しつつ、円滑なプログラム運営が行えるように尽力する。			

付 属 施 設 等

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		地域連携・研究推進センター用評価シート	
評価対象年度		2019年度	
記入者（評価単位責任者）	職名	地域連携・研究推進センター長	
	氏名	太原 孝英	
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入		
研究	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①FD研修会において、コンプライアンス教育及び倫理教育を実施。日本学術振興会の研究倫理eラーニングの受講を全学に徹底した。</p> <p>②科研費新規採択者に対して「外部研究資金獲得に伴う追加研究費」を配分した。</p> <p>③科研費申請手続等説明会において、有識者による「科研費申請のためのポイント」を説明する時間を設けた。</p> <p>④剽窃チェックツール（iThenticate）を導入し、研究紀要の査読審査や博士論文の審査において利用を促した。</p> <p>⑤研究紀要を刊行した。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①利益相反及び知的財産権の取り扱いに関するルールの制定。</p> <p>②機関リポジトリ運用に係る方針等の策定。</p>		
地域貢献	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①新宿キャンパスのある落合・中井地区における連携事業も継続し、遺跡フェスタ、染の小道等、地域でのイベントに積極的に係わり、連携を深めた。</p> <p>また、岩槻キャンパスにおいても、地域交流しそめん等のイベントや福祉施設でのボランティアなどを実施した。</p> <p>②新宿区の「大学等との連携における商店街支援事業」に参加し、目白銀座商店会、目白通り商いの会と協働し地域を盛り上げた。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①包括連携協定の締結により、本学の多種多様な分野の知の資源を生かし、地域が抱えるさまざまな課題に貢献していきたい。ニーズが高い学生ボランティアについては、本学と地域が連携して行われる各種イベントに広く学生を募集し、対応していきたい。</p>		
産学連携	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①2018年8月、JSTが主催する「イノベーションジャパン2018」（JST採択制イベント）に1名の教員が応募した。（結果：不採択）</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①マッチングイベント等に出展し、産学連携による様々な事業を展開していきたい。</p> <p>②企業との協働、コラボ商品の方向性、参加するイベント等の見直しを行う。</p>		
その他	<p>(1)特筆すべき事項</p> <p>①6分野の研究紀要を編集・刊行した。</p> <p>②本学の話題性の高い取組み等について、教育担当記者に多く配信される大学プレスセンターを活用しマスコミへの配信を行った。</p> <p>(2)今後の課題</p> <p>①地域連携・研究推進センターの広報について情報発信とその方法の検討が必要である。</p>		

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		心理カウンセリングセンター用評価シート	
評価対象年度		2019年度	
記入者（評価単位責任者）	職名	センター長	
	氏名	庄司 正実	

自己評価 ※箇条書きにて記入

(1)特筆すべき事項

①相談件数

2013年開設以降相談件数は漸増してきたが2019年度は前年度相談件数(4112件)より若干低下した。年間のべ面接件数は2005年以降1000件以上となり、2008年以降2000件以上、2013年以降3000件以上となっている。今年度相談件数が若干減少した理由として、今年度にて常勤助教2名とも有期退職となるため年度後半は常勤担当の相談や新規受付を制限したことがあると考える。

②地域貢献活動

- 1)公開セミナー：8月31日に全体講座「睡眠障害と睡眠導入剤」、分科会として「アクセプタンス&コミットメント・セラピー」「同性愛と精神分析」「WISC-IVの基本的な解釈と特性に合わせた支援」「プロの応答技術のエッセンスを身につける」を実施した。参加者は60人以上であった。
- 2)公開講座：12月21日「人はなぜ薬物依存症になるのか？—その理解と回復支援—」講師 松本俊彦（外部講師）を実施した。いずれも当初の予定通り実施できた。参加者は120人以上であった。

③センター内教育活動

相談員への臨床教育として外部講師および学科教員による事例検討会を4回実施した(6月28日、8月3日、11月27日、12月8日)。第2回と第4回目は外部講師(松木邦裕先生、及川卓先生)を招いて研修を行った。いずれも当初の予定通り実施できた。

④大学院生実習環境の整備

公認心理師対応カリキュラムとなり大学院生の実習を従来より早め、1年生の秋学期から実施している。そのため大学院生への指導も十分行うようにした。

(2)今後の課題

①相談室の解説状況への対応

2019年度末頃より新型コロナウイルスの流行に伴い、相談室の開設に制限がかかるようになった。カウンセリングは対人接触が濃厚であり感染対策が十分求められる。2020年度の感染状況によりカウンセリング実施に影響が出ると予想される。状況に適切に対応してカウンセリングを実施していく。

②カウンセリング内容

2019年度後半より今後のグループカウンセリング実施にむけ計画を作成している。これは心理カウンセリングセンターの活動を広げ学生教育に生かすためである。学生の実習として個別カウンセリングだけでなく集団カウンセリングについて学ぶことは重要と考える。年度当初の予定としては2019年度後半からの実施を想定しているが新型コロナウイルス感染状況により実施開始については再度検討する。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究所用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	教育研究所
評価対象年度		2019年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	所長	
	氏名	原 克彦	

自己評価

(1) 特筆すべき事項

● 研究所全体における活動

- 1: 所員会議の実施
 - 所員会議を年間6回開催した。岩槻キャンパスの所員はWeb会議システムを用いて参加した。
 - 研究所事業・業務の審議決裁及び、公開講座、紀要の発行に関する査読などを実施した。
 - 会議資料議事録などについては電子化しメール等で共有を行った。
- 2: 所報の刊行
 - 所報『人と教育』を刊行した。
 - ・第14号の特集テーマは「学習者の多様性と教育」とした。
 - ・FD部門で実施した公開講座の内容を収録するなど、研究所の諸活動についての実績についても採録した。

● 研究部門における活動

- 1: 「プロジェクト研究」の推進
 - 以下のテーマについて定期的にグループ会議を行い、課題の整理や調査の実施などを行った。
 - ・「アクティブ・ラーニング」: 前年度に教員対象の実態調査行っており、この結果をもとに本年度は、AL実例とQuestion & Suggestion で構成される本学教員向けの冊子体「AL実例集」を作成・配布した。
- 2: 機器貸出しの実施
 - iPad、タブレットPCや、プロジェクタ、カメラ、ケーブルなど多岐にわたる内容で貸出しがあった。
 - iPadの貸出しが多く、アクティブラーニングやゼミでの活用があった。
- 3: 紀要の刊行
 - 『目白大学高等教育研究』第25号を刊行した。採録された件数は、研究論文2件、事例報告8件、資料6件であった。

● FD部門における活動

- 1: 公開講座の実施
 - 11月30日(土)にFD実施委員会と共催で公開講座を実施し、その内容は所報『人と教育』第14号に掲載した。
- 2: 文献資料の収集
 - 高等教育に関する文献資料の収集を行った。

● IR部門における活動

- 1: IRデータの収集・管理
 - 本研究所が保有するIRサーバーの管理及びサーバー上のデータのフラット化・クリーニング等を行った。
- 2: 学内からの依頼に対するIR情報の分析
 - 学内の各学科学部・各部署からの依頼に基づき、IR部門が保有する入試、学籍、成績等のデータとあわせた分析を行った。
 - 学内の各学科学部・各部署からのデータ提供とあわせ、IR部門が保有するデータとあわせた分析を行った。
 - IRデータを利用するFDの実施をした。
- 3: 各種調査の実施
 - GTEC、新入生アンケート、IRコンソーシアム学生調査、卒業生アンケートの企画実施を行った。
 - 授業評価アンケートの企画補助・実施補助を行った。
- 4: 高等教育政策に関する動向調査
 - 高等教育政策に関する文献資料の収集及び研修会などへの参加を通じ、高等教育政策に関する動向調査を行った。

(2) 今後の課題

運営委員会時に学長より示された教育研究所事業方針・運営方針を受け、教育研究所の改組の方向性を議論し、学長に答申を提出した。
これを受け、高等教育により機能を特化した「目白大学高等教育研究所」へと、2020年度から改組発展することとなった。
今後改組の趣旨にのっとり、更なる活動の充実が望まれる。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		メディカルスタッフ研修センター用評価シート	
評価対象年度		2019年度	
記入者（評価単位責任者）	職名	センター長	
	氏名	武田 保江	
項目	自己評価 ※箇条書きにて記入		
教育	<p>(1)特筆すべき事項 脳卒中リハビリテーション看護認定看護師教育課程は2019年度休講のため、教育活動は実施していません。</p> <p>(2)今後の課題</p>		
研究	<p>(1)特筆すべき事項 脳卒中リハビリテーション看護認定看護師教育課程は2019年度休講のため、研究活動は実施していません。</p> <p>(2)今後の課題</p>		
学生指導	<p>(1)特筆すべき事項 脳卒中リハビリテーション看護認定看護師教育課程は2019年度休講のため、学生指導は実施していません。</p> <p>(2)今後の課題</p>		
社会貢献	<p>(1)特筆すべき事項 脳卒中リハビリテーション看護認定看護師教育課程は2019年度休講のため、社会貢献活動は実施していません。</p> <p>(2)今後の課題</p>		
組織マネジメント	<p>(1)特筆すべき事項 認定看護師教育課程の休講・閉講に係る学内・外の諸手続きは、2019年度内に終了しました。</p> <p>(2)今後の課題</p>		
その他	<p>(1)特筆すべき事項 2020年度第4回 学部長等会議にて、「目白大学メディカルスタッフ研修センター認定看護師教育課程に関する規程」を廃止することについて、規程廃止時期を2020年度3月31日とする旨が承認され、2020年度第5回（臨時）保健医療学部・看護学部合同教授会にて報告されました。</p> <p>(2)今後の課題</p>		